

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

[特集] 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと
「親支援」とは言うけれど

[子ども学探訪] 倉橋惣三とキンダーブック
ツーリズムへのいざない

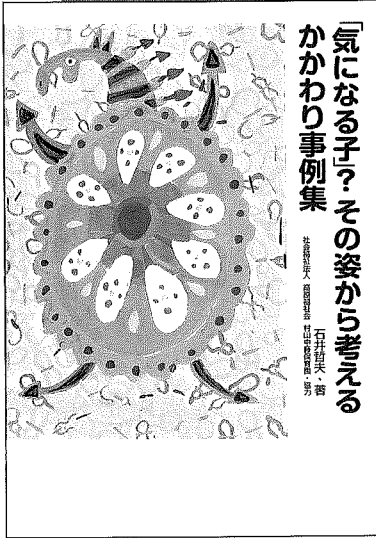
[海外レポート] イタリア保育“おもいきって”参観記(1)
ノストロ プロジェクト

冬 2012
|
冬 2013

since 1901

「かわり」の
考え方がわかる!

実践事例を ていねいに読み解く!



「気になる子」その姿から考える
かわり事例集
石井哲夫 著
社会福祉法人高原福祉会 村山中藤保育園 協力
(法人理事長 高橋保子先生が読売教育賞 受賞)

Point ①
本書を通じて

子どもとの
かわりが
見えてきます!

Point ②
本書を通じて

園外との連携が
見えてきます!

Point ③
本書を通じて

体制の整え方が
見えてきます!

著:市川浩志

「気になる子」その姿から考える かわり事例集

石井哲夫/著

社会福祉法人高原福祉会 村山中藤保育園/協力
(法人理事長 高橋保子先生が読売教育賞 受賞)

定価1,890円(税込)

25.7×18.2cm 120ページ

10928

こんな事例に心あたりはありませんか?

- 叱られることが多いRちゃん……………4歳・女児
- 着替えのできないEちゃん……………4歳・女児
- 人とかかわるのが苦手なSちゃん……………3歳・女児
- お遊戯会に参加したTくん……………4歳・男児
- 保育者をどうサポートするか
- 子ども家庭支援センターとの連携

対談 石井哲夫 × 野田聖子

「子どもを育てるということ
—ハンディキャップをもつ子どもの親として—」を掲載
(衆議院議員)

「発達障害者支援法」の産みの母、野田聖子議員が、一人の子の親として、一人の議員として考えたことを語ります。

実際に園から寄せられた事例と対応例を紹介

事例紹介 第2章 事例3から

「着替えのできないEちゃん」 (4歳・女児)

入園から1年後の様子
Eちゃん(4歳)は、着替えが苦手な子で、着替えの時間がかかり、保育者の負担が大きい。保育者は、Eちゃんに合わせた着替えのサポートを工夫し、Eちゃんも少しずつ着替えが上手になってきた。Eちゃんも、着替えが苦手な子であることを自覚し、保育者のサポートを受けながら着替えが上手になってきた。

● 保育者の悩み ●

「着替えに時間がかかる。
ボタンを見てくれない」という悩みが。

● 対応例 (かわりの特徴 など) ●

「ボタンをもつことができない」のか、それとも、
「ボタンをボタン穴に入れられない」のか。
何ができないのか理解する。

子どもの姿に変化が!

著者・石井哲夫による
解説や事例から派生した
疑問に広げるQ&Aなど
読み応え十分!



図:ヤマタカマキコ

子どものまなざしの向こうに

目に見えて写っているものの向こうに、
見る者の心に映るもうひとつの子どもの世界が
聞こえてこないでしょうか。



空から
突然の贈り物
そつと そつと
つかまえよう

子ども学探訪

編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック

ツーリズムへのいざない～地球が小さくなり始めた時代～ 浜口順子 ——— (49)

海外レポート

イタリア保育“おもいきって”参観記(1)「ノストロ プロジェクト」 金澤妙子 ——— (55)

講演

「絵本の挿絵について」 黒井 健 ——— (60)

アーカイブス

幼児の教育110年の散策

鈴木とく先生が遺した保育実践記録を読む — 第51巻第7号(1952年7月)より — 塩崎美穂 ——— (66)

目録

「幼児の教育」平成24年 総目録 ——— (70)

子ども学のひろば

学会 研修会情報・読者投稿・エピソード 他 ——— (71)

プロローグ 親を味わう 浜口順子

「親支援」という特集を組んだ。「保育に欠ける」子どもの親や、経済的貧困の親を支援するだけでなく、普通の親を支援する視点が重要になってきたのだという。テレビニュースからは相変わらず、子どもを危^{あや}めた親が「しつけのつもりで」と語ったという話が流れてくる。

そんな時、倉橋惣三著『育ての心』の次の文章が胸に飛び込んできた。「ちと極端ないい方かも知れないが、子というものは親から教育を与えられたいなどは願っていない。願っていることは、親その人を与えられたいことだ。親が欲しいのだ。親が味

わいたいのだ。自分に生々しく触れてくる親の心を何よりも求めているのだ。(中略)世に親から放任せられている子ども等は素より淋しい。親を味わい得ないからである。しかも親を味わい得ないという淋しさは、余りに教育的一点張りの家庭の子に於ても、往々にして同じである。」「(母ものがたり)より

親は、子育ての役割を担うだけの人ではない。「子」を前提として「親」であるだけで、子どもが目の前にいないにも関係ない。倉橋は「うしろ向き」の、人として自分自身を生きようとする親の後ろ姿を、子どもはじっと見、感じているとも語る。

目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある
スタンドグラスの模様をデザイン化したものです。

【写真】

子どものまなざしの向こうに ①

【目次 プロローグ】

親を味わう 浜口順子 ②

【特集】

問い直そう、保育の中のあたりまえのこと 8

「親支援」とは言うけれど

インタビュー 牧野カツコ氏（聞き手）浜口順子・菊地知子 ④

私はこう考える 命 絆 未来
～子育てひろばの現場から～ 松崎恭子 ⑬

「聴く」ことから始まる関係を大事に 原 美紀 ⑬

親支援とは 佐藤恵美子 ⑳

【シリーズ】

子どもが育つ場所を訪ねて

ゆうゆうのもり幼保園 宮里暁美 ㉔

【実践研究】

私の保育ノートから

私の先生は子どもたち 小林奈央 ③①

ごちゃごちゃと遊ぶ中で 小川知子 ③⑥

【保育エッセイ】

続・心が育つということ（最終回）

「向き合う」ということ 豊田一秀 ④②

【からだ考】

食べる つながる 育つ

保育園給食から（前） — 離乳食を考える 兼田祐子 ④⑥

特集

問

い直そう、保育の中のアたりまえのこと8

「親支援」とは言うけれど



インタビュー

まきの 牧野カツコ氏

宇都宮共和大学教授。お茶の水女子大学名誉教授。ご専門は
家族関係論・家庭科教育論。著書：『子育てに不安を感じる親
たちへ』ミネルヴァ書房（2005）、『人間と家族を学ぶ家庭科ワー
クブック』国土社（2000）ほか

子どもが減ってきたことと、子育てを苦手に感じたり忌
避したりする親が増えてきたことは連動していて、循環的
な関係になっている——この危機的関係に社会が気付き
始めた当初から、牧野先生は警鐘を鳴らし続けてきました。
今回のインタビューでは、「親支援」の枠組みが大きく変
化し、「支援」の考え方自体を問い直す必要を感じました。
これからの子育て環境を改善するには、父親の在り方が重
要なポイントなのだということ、育児から社会を変え得る
という明るい展望も示していただきました。

また、異なるお立場の三人の方からも、「私はこう考える」
コーナーで、それぞれのご意見を伺っています。

聞き手 浜口順子・菊地知子（本誌編集委員）



「親支援」は時代とともに変わってきた

浜口 一言で「親支援」と言っても、時代でずいぶん、考え方が変わってきているようですね。

牧野 そうです。そもそもの保育所や保育政策の始まりを考えると、まず、「保育に欠ける」子どもが対象でした。つまり、保育・養育ができない親の子どもに対す、養護施設とか乳児院など。これは歴史が古くて、家族が崩壊しているような場合に「代わり」の家庭を提供する、という形。それから、親が働きに出ていかなければならない家庭の子どもも「保育に欠ける」ということで、特に母子世帯などに對して、「代わる」という形で親支援は行われてきたと思います。そういう中で、「子どもはかわいそう」と思われてきて、できるだけ保育に欠ける状態にならないようにというのが世の中の考え方であったように思います。「母親が自分の都合で仕事をもって働けるにき出るなんて」という風潮が、私のころもそうでしたが、ありました。特に〇〜三歳までの子どもにも

ついては、家庭が保育すべきだっていう考え方。

浜口 「三歳児神話」といわれるものですね。

牧野 戦後は、高度成長経済で、雇用労働が圧倒的に増えてきますから、家庭が仕事の場所じゃなくなつて、父親が働きに出て母親は家に残る。日本では、三歳児神話と結び付けたり、性別役割分業意識を学校教育でも育てたりして、「男は仕事、女は家庭」は経済成長には大変うまく機能したといえます。

ところが、乳児死亡率が低くなり、子どもを丁寧に育てていこうという中で、急激に出生率が低くなります。子育て期間が短くなり、平均寿命もものすごく延びて、女性の仕事は家事育児だけではないのか？と、女性の生き方が問われるようになります。その中で、働き続けようという女性も増えてくる時代になりました。

もう一つ、親支援の変化として大きいのは、経済成長とともに、都会に出てきて、小さな2LDKの公団住宅などで子育てをするようになり、父親や、成長した子どもたち、親類の人たち、地域の人たち

とか皆が、子どもの顔を見てどこの誰ってというのがわかるような社会がなくなつた。その中で、お母さんたちが孤立して、子育てが非常に大変だつていう意識をもつようになる。昔の親から見れば、たった一人の子ども、何でそんなに変なのかといわれるような状況が起こってきました。私が「育児不安」の研究を始めたのが、一九八〇年代初めなんです、一九七〇年代の経済成長ののつげにそういう状況が起こってきていて、子どもの夜泣きがひどく、上下左右の集合住宅に聞こえちゃいますから、困つた母親が毛布をかぶせて、気が付いたら子どもが窒息死していたというような事件が起こつた。

浜口 それは事件として報道されたのですね？

牧野 はい、子殺し事件になるわけですから、三歳児神話が一般的だつたころには、何という冷たい母親か、何でそんなことが起こつてしまうのか、というふうにもよく調べて見ると、一生懸命子育てをしているお母さんは非常に悩んだり苦しんだりしている。そりゃそうですよね。〇歳の子どもを産

んでみるまで、抱いたこともない、こんなに手間がかかるっていうことに気付く体験もない。窒息死させられないまでも、子どものほうもすこく息苦しい時代になつたのではないか。幼稚園に入れば、お母さんの前では「いい子」なのに、入園した時、行きたくないと言つたり、コミュニケーションが取れなかつたりとかで、また、母親が不安になる。

浜口 密室の中の保育ですね。

牧野 はい、子どもにとってはある種の「保育に欠ける」状態だと思います。一歳、二歳になつたら外へ出たいし、子どももお友達が必要だし、何より大事なのが、お母さんがいろいろ語り合える友達が必要。育児不安の研究をしてみると、お母さん自身の友人関係、ネットワークというのが育児不安を低めるっていうことがわかっています。そして、父親が育児に責任をもつていて、育児を母親一人の仕事と



は思わないっていうことがすごく大事なんです。私も、その中で、「子どもの発達と父親の役割」について研究を行ったり、家庭科の男女共修が必要だ、と訴えることになるのですが。

親支援は社会にとってプラス

浜口 時代とともに、親支援の対象が、すべての親にまでぐっと広がった印象です。

牧野 そう。これについては、行政はまだ対応が遅れています。親たちが自分たちで子育てサークルをつくったり、子育て広場をつくり始めたり、行政に要求したりし始めています。専業主婦の家庭、特に三歳未満の子どもの家庭についても支援が必要であると考えられるようになりました。

先日、都内のある市の子ども政策課の方からお話を伺いました。そこは育児休業制度がかなり進んでいる自治体ですが、待機児童対策で〇歳児の保育は国の優遇政策があり、〇歳児保育に力を入れてきたそうです。親としては、〇歳を過ぎて後から入れよ

うとしても定員枠が空かないので、無理してでも早く仕事に復帰して、〇歳から保育園に入れる人も少なくないということでした。

浜口 一歳児以上で復帰、というのを制度的な基本にしてしまえば、気楽に休めるんですよ。

牧野 そうなんです。いろいろな事情で〇歳から働きたい人もいますし、働かなければならない家庭の親たちもいます。しかし、母親が家庭にいて〇歳の子どもは、親と二人だけでいいかっていうと、これも疑問です。どんどん言葉を覚えていきますし、たった二人で向かい合っていたら、本当に子育てってきついのです。子どもが〇歳でもお友達と遊べる、お母さんも友達付き合いができる、ちよつとお茶を飲んでほつとできる、そういう場所が必要です。いわゆる「子育てひろば」といわれているものが各地にできまして、そこでは相談できる人もいるという、新しい親支援施策になってきました。

スウェーデンなどの育児休業制度が整っている国では、育児休業を取らせることが、経営や商品開発

などいろいろな会社の活動にプラスになるという考え方をもつようになっていきます。十年くらい前に、ドイツの某市の市長さんが育児休業を取って、ベビーカーを押して繁華街に出ている記事を見ました。ここで市民の生活や子どものことを学んで、いろいろなことに気付いてそれを行政に生かせるという話を聞いて、当時、本当にびっくりしました。育児の経験をするということの大切さを社会的に認めていけば、もっと自由に会社の体制が柔軟になるだろうし、そこに育児休業を取っている人のための手当がいくつていうようなことが親支援なんですよ。

自分の子ども、社会の子ども

菊地 今回のテーマの「親支援」の「支援」という言葉ですが、親目線でも、子ども目線でも、家族目線でもないのではないかと、という問題意識がそもそもあったのです。社会のまなざしとして、「助けてやる」的なまなざしに変え難くあるかもしれないと。子どもにとって「今どうしたらいいのか」という時

に、心を寄せる人が親だけではないということがとても大事なことだと思っています。

牧野 本場にそのとおりです。本田和子先生は「子どもへのまなざし」という言い方をされますが、社会全体が子どもをどう見ているか、とか、社会が子どもを育てているということが大事なことです。保育に関して言うと、私はやはり子どもの権利条約の中にある「子どもにとっての最善の利益」が基本と思います。子どもが一番中心にあると思うんですね。大変気になるのが、延長保育とか〇歳児保育という、保育の要求の拡大ですね。それから病児保育。働く母親から見ると、責任ある仕事をするようになればなるほど、病児、特に伝染病にかかると二週間くらい保育園に行かなくなるのは本場に大変です。介護の場合もそうですけど、やっぱり小さい子どもを残して、しかも病気で体も弱っている時に、仕事に行かなければならないというのはとっても辛いことだと思う。でも基本的に、子どもにとっての最善の利益が重要ですから、子どもが良いケアを受けら



▲牧野カツコ氏

れるということが大事なことで、基本的には子どもが病気の時には休める環境、それが母親の職場での不利益にならないというような環境がつくられていかなければならないと思います。

浜口 「子どもにとっての最善の利益」が、「個々の親が考える、わが子にとっての最善の利益」にすり替えられるという誤解がありますね。今の日本では行政側がことさら親の責任を強調する印象があり、十分な保育環境を保障するより先に、「親が自分で考えて、お子さんにとって一番いい保育を選んでください」という響きがあります。その中で親も子どももますます追い詰められているように思えます。客観的な調査や専門的な研究に基づいた知見を行政がもっと活用して、この日本の子どもにとって最善で

ある保育環境を、責任をもつて実現することが必要ですね。

牧野 とても大事なことだと思います。日本の場合、長く子育ての責任を家族に置き

てきました。それこそ明治以降の家制度の時代には、子育ての責任を家長に置き、戦後は母親一人に置いて、ということでも来りました。ですから、子どもにとっての最善の利益を、母親は自分にとっていい子に育てること、と考えやすい。父親も一緒に密室の家族にとつての最善の利益ということになりやすい。そういう危険があります。でも、子どもの権利条約が目指しているところは、社会の中の次世代という子どもなんですよ。つまり「あなた一人の子どもではないんですよ。社会でいろいろな活動ができるみんなの子どもを、みんな育てていくのですよ」ということが徹底されていかなければならない。

育児が楽になるきっかけ

菊地 子どもが元気で明るく聞き分けがよいような時には、親は自分の力だけでうまく育てられているように思いたくなる。でもそれは錯覚で、本当にしようがないな、どうしよう、と思うような時に、他の子どもや周りのお父さんお母さんに、「意地悪する

ような子じゃないよ」って言ってもらったりすると、この子は本当に、周囲に生かされているのだと思える。ガチガチの家族主義や家父長制の歴史を今なお引きずる中であれ、血縁に縛られないつながりや、そのつながりの中でこそわが子や自分が生かされている、と実感することで、風穴がしつかりあいていくことがわかるように思います。

牧野 そうですね。私は、育児不安の研究において、不安が強い親の子どもはマイナスだというようなことはあまり調査したくなかった。というのは、まだ三歳段階で先がどうなるかまったくわからないのに、そこで子どもを固定的に見てしまうことは危険ですから。それに、子どもはどんどん変わりますから、三歳児の親にとっては、親が変わることのほうが大事なことだと思つて。

でも、お父さんが育児に参加することは子どもにとってプラスだよ、つていうことはやっぱり言いたいと思いました。『子どもの発達と父親の役割』（ミネルヴァ書房 一九九六年）という本の中で、家庭教

育研究所の方々と一緒に、三歳の子どもの発達についてかなり精度の高いデータを集め、社会性、情緒性、言語などいろいろな側面の発達を調べたら、子どもとかかわりの深い父親の子どもが、全体的に発達が良いという結果が出ました。子どもとかかわるその柔軟性の高さとか、臨機応変に子どもに対応ができるか、ということ、会社の中で要求される性質と違うものです。母親が接していてもそうですけど、子どもつてどう動きたすがわからない存在で、それとかかわることの面白さつていうのを体験することが大事だと思ふんですね。紋切型に接していても子どもは泣き止まなかつたりしますからね。別の手法を考え出したりして、子どもが嫌だと言った時に子どもをなつかせることができるのか、子どもの関心をそらせてうまく関係もてるのか、そういうようなこと。

浜口 それ、かなりな父親ですよね（笑）。最近、テレビのワイドショーとかで「イクメンお父



▲浜口順子氏

さん」の特集などを見ると、「お風呂に入れてくれる」とか、「おむつを替える」とか、何をしてくれるか、が注目されます。でも、今おっしゃっていることはそういうことじゃないですよね。

牧野 まずはそこもやってもらわないと(笑)。いいところ取りでもいいんですよ、最初は。母親は、育児しているいろいろあって、楽しいところと面倒な手間がかかる場所両方あることを知っているから、こんなに大変なのよ、こっちもやってよってすぐ言いなくなります。でもまずは楽しんでもらって。楽しみの中で、臨機応変に対応しなくちゃいけないってことに父親も気付いて、自分の違う感覚が働いていくという体験をしてほしいと思います。

お父さんが生活の中で動くこと

浜口 何もしないお父さんでも、夫婦が仲良かったらいいんじゃないかと思いますが。

牧野 それも悪くはないんですけど、弱いですよ。何で絆が深まるかっていうと、手足が動くというこ

とが大事なんですよ。やっぱり人間は家庭の中で生命維持のために食べたり着たり住まったりという生活をしています。子どもも生きていくためには、笑顔だけに接して空気食べているわけにはいかなから、やっぱり着る、食べる、寝る、住まう、そこから快適に整えられる環境をつくるっていうことはすごく大事。お父さんだけのことで言っていられません。お母さんだって、何でも既製品で何も手間がかかることをやってこなかったから育児が辛いついていう面もあるんですよ。昔の女の人は、農作業とか家事労働とかありとあらゆることを家の中で労働してなくちゃいけないかった。それは子育ての延長線上で家事労働をやってきた体にとっては、子どもの衣服を縫うところからとか、寝かせつけるとか、食べ物を作るとか、いろいろなことが大変だったけれど、ほっと終わって寝顔を見て休まるっていうそういうのがあって、労働があつて休みと楽しみもあるわけだから。

浜口 動いて生活すること自体が大事だということですね。

菊地 震災以降、福島県の保育園の保護者の方たちとつながりができて、今年四月の終わりに二年ぶりのお花見をするという時にも仲間入りさせてもらいました。夜勤明けだという若いお父さんが、自分の子どもだけでなく、よその子にもひとつつかれて遊んでいたりする。ご自分の生活もいろいろと大変な中で、それでもそうやって集い、子どもたちとかかわっている姿に、希望を見た思いがしました。

また、集いの中心にいるお父さんが別の時に、「僕、イクメンっていう言葉は嫌いなんですよね」とおっしゃった。イクメン代表みたいなお父さんなんですけど(笑)。「だって、かかわりたくたってわが子とかかわれない人だっていっぱいいるじゃないですか」とおっしゃって、とても共感しました。本来子育ては、わが子に向き合い自分を高める、というような狭いことではなく、わが子よその子の別なく人が人の育ちにいや応なくかわってしまう。目の前にいる子どもの先にもたくさんの子どもが居、子どもを巻き込んだ人の社会があることが自ずと見える。そ

ういうものではないかと思えます。

その日、池に落ちて濡れぬずみになった子がいたら、皆でやいやい「母ちゃん来たら怒られるぜ」とか「まだ少し陽があつてよかつた」「うち、シャツなら替え持つてるよ」とか言いながら、その場の総力を挙げて着替

えをさせているんです。そしてお母さんが来てやっぱり怒られたら、皆で一緒にしょぼくしたりして。そういうつながりの中で子どもたちが育っているのだと、感心したり、安心しました。

牧野 アメリカの歴史社会学者ステファニー・クーンツが、「子育てという大切な仕事を両親だけに任せはおけないと考える社会の中で子どもは一番よく育つ」と言っています(『家族という神話』筑摩書房一九九八年)。つまり家族が閉じていないということ。社会全体で子育てをしようと考えてる社会、なかなか難しいですが、福島だけでなく広がってほしいですね。



▲菊地知子氏

私はこう
考える

「親支援」
とは言う
けれど

命
絆 未来

く 子育てひろばの現場から く

松崎恭子

命の誕生

赤ちゃんが誕生した時、この命が皆に愛されながら末永く健やかに育ってほしいと願うと思う。命を育む最も大切な乳児期は育ちの出発点であり、親子関係の基盤をつくる大切な時期である。

私が勤務する子育てひろばは、約68平方メートルの一部屋であるが、開設七年目を迎え、延べ十四万人強の利用がある。子どもが生まれた幸せもつかの間、母親一人が赤ちゃんの世話に奮闘していることが多く、初めての一対一の育児に疲れ果て、保健師

さんから紹介された地域の子育てひろばに○・一・二歳児親子が訪ねてくる。ひろばに来た赤ちゃんを大学生が迎えて抱っこし「かわいい！」と叫んだことでわれに返り、「私の赤ちゃん、かわいいんですよね」とバランスを取り戻し、「息が抜けた。今日ここへ来てよかった」と感想をもらす母親も多い。

子育ての悩みのアンテナ

現代の育児は、近隣との関係が希薄で頼れる人もあまりなく、夫は仕事で帰宅が遅く、母親の子育ての状況を理解してくれる身近な存在がないため、母

子カプセル」と呼ばれる。地域からも家族からも孤立した母親たちの育児負担は、働いている親よりも強い様子が、ひろばの母親の声からもわかる。

母子カプセルが二十四時間無期限で続く場合、親の心理的な圧迫感はかなり強く、「子どもはかわいいが、この子が生まれてこなければよかつたと思う時がある（一か月児）」。「いくらあやしても全然泣きやまず、ついに保健師さんに電話してしまつた（三か月児）」と助けを求めることを恐縮する母親もいる。「まだこの月齢なのに二回も高熱を出させてしまい母親のせいだと思われる。こんなに足が冷えていていいのか、誰にも聞けなかつた（五か月児）」「現在のこの月齢で発達障害がわかると本に書いてあつた。幾つも当てはまる項目があるが、発達に異常がないか教えてほしい（六か月児）」「いつもこの子と二人きりなのでこの食事量でいいのかわからない。先月から百グラムしか体重が増えていないがどうしたらよいか（十か月児）」など、乳児期という育ちの出発点で強い不安を抱えながらも誰にも相談できずにい

る母親が多いことがうかがえる。

つながりをつくらせよう

子育てひろばに来て、つかの間でも子どもが遊ぶだと、親はほつとできる。限られた空間の中で、自分以外の誰かが自分の子を一緒に見ていてくれるという安心感も、スタート間もない親には大切である。何かあつても誰かがそばにいてくれる。そばにいる誰かと話してみたら肩の力が抜けた。毎日通うひろばの中で、顔なじみの親子ができてくると、声を掛け合い、相手を気遣うようになる。小さな気付きを伝え合い、成長や喜びを分かち合う。

「お教室に通えば個人の能力は身に付くが、せっかく一緒に来ているお友達との関係は、ひろばのように深まらない」。毎月実施している避難訓練後には、「ここに来れば大丈夫ということがわかつた。いつもこの子と二人きりで、災害が起こつたらどうしようと不安でたまらなかつた」。抱っこし過ぎて手首が腫鞘炎という親に対し、「私も離乳食は絶対に手作

りと決めていたが、ある時、頑張らなくていいんだと思えるようになって楽になった」等々、先輩ママから直接耳にする体験談やアドバイスは、後輩ママの緊張を解きほぐす。子育ての出発点を支える子育てひろばには、親子同士のエンパワーメント、引き出し合う力、支え合いの姿が日々幾つもある。

支援者の専門性

子育てひろばには毎日多種多様な相談が寄せられる。専門性が必要な質問も相当数あるが、保育を基盤に保健・心理・栄養・福祉などの支援者が相互の専門性を活かしながら多面的多角的にチームでかわる。親子のありのままを受けとめながら、指導や正論でなくあくまでも親子自身が育児スタイルや方法、ペースを選択できるようにアプローチをしていく。

医師に妊娠中から異常を宣告され、出産後も子育てに不安が続く親、産後の体調が思わしくなかったり、子どもの様子が気掛かりで外出もままならず多くの時間を家庭で過ごしている親子も多い。

親の悩みや不安点をじっくり聴くことで明確にし、家庭で行っていくことと、専門機関と連携しながら協力的体制をつくっていくことを整理付け、困った時はいつでも子育てひろばに来てくださいというメッセージを発信しながら長期的な関係性をつくっていく家族支援の大切さも痛切に感じている。

引き出し合う関係性

わらべうたや手遊びなどを親子に伝えるだけでなく、親子で歌い、動く。その上で、親自身が人に歌ってもらい心地よさを感じてもらったり、身体にふれ合い語りかける人とのかわりを親同士で体験してもらいながら、立場を変え、子どもの視点に立つて、してほしいことを想像してもらっている。

子どもと家族の育ちを支える社会の基盤づくりにおいて父親の存在は不可欠である。社会的視野をもつ父親が地域の中にネットワークを広げ家庭や社会の中で絆を深めていくことが急務であるように思う。

(NPO 昭和 昭和女子大学)

私はこう
考える

「親支援」とは言うけれど

「聴く」ことから

始まる関係を大事に

原 美紀

「びーのびーの」

巨大な政令指定都市である人口三七〇万人を越す横浜市において、初めて子どもをもった親たちが、もう少し地域で子育てできる居場所がほしい！と声を上げてできたのがNPO法人びーのびーのです。十年ほど前、子育て支援が叫ばれ始めたころ、保育園・幼稚園だけでなく、親の就業の有無を問わない、広い意味での在宅家庭支援の必要性を感じた子育て真っ最中の親たちが立ち上げたのが「おやこの広場びーのびーの」でした。親も子も「のびのび育ち合いい、支え合う環境づくりを目指そう！」ということ

で、「のびのび」の逆をとって「びーのびー」と名付けられました。

商店街の二十坪程度の空き店舗を借り上げ、初年度は手弁当で運営。その場の維持のために、かわるメンバーと必死になりながら、バザーや企業とのタイアップによる業務やイベントなどを行い、その収益金で、家賃や固定費を何とか支えていました。

世の中の流れが介護保険制度の導入後、子育ての社会化をどう推進していくかの検討に入った時期にちょうどびーのびーのような場が立ち上がったことで、私たちとしてもこのような場がこれから地域に点在していくことの必要性を伝えつつあったとこ

ろに、とても速いスピードでこの事業が新規予算で国会を通過して、初めて「つどいの広場事業」が創設されました。横浜市も一年遅れて市費を上乗せし、「親と子のつどいの広場事業」として、びーのびーのも正式な補助事業となりました。

私たちがまず求めたことは「食う・寝る・遊ぶ」の三要素です。あたりまえなようで、当時、地域の場で子どもが過ごすためのこの三要素が満たされる場は皆無でした。公共施設では、おむつ替えや授乳行為はもちろんのこと、飲食さえもできないところが大半でした。

びーのびーのは創設から十二年を経た今も、九時半～十六時まで開き、毎日基本2名のスタッフと共に、学生を含めた多様かつたくさんのボランティアが通ってきています。未就学児家庭を対象とする事業ですが、「主に0歳から三歳児とその親のためのもう一つの家」として、一日平均15家庭ほどが行き来しています。

今はこのようなひろば事業が全国に約六千か所に

広がり、北海道から沖縄まで実践者が増えてきています。子育てする中で親子の居場所の選択肢が増えることにより、生活リズムをつけたり、気軽に相談ができたり、親自身で共助の関係をつくったり、地縁組織の方々との顔つなぎができたり……これからの親子の暮らしを支える安全網を築ききつかけようとしています。



▲それぞれが思い思いに過ごすひろば
（「おやこの広場びーのびーの」の日常風景）

ひろばで大事にしていること

ひろばで大事にしていることは、親子ともども「その人自身を受けとめる」ということです。

私たちのところに常連のように通う利用者の中に、わが子のことを「へたれちゃん」と呼ぶお母さんがいました。ヘルパーの資格もあつて、とても気が回つて、ひろばに来ると他の子の面倒をたくさん見てくれて、他の親のサポートもさりげなくしてくれているすてきなお母さんですが、スタッフ内の話し合いで、実は認められたいって思う気持ちがとても強いのではないかと。という意見が出ました。わが子を卑下することも多い一方、他の子にモノを投げられたり、取り合いになると、わが子と共に被害者的な意識が強くなつたり、不利益を受けがちな発信下手な子の母親という立ち回りをします。

いろいろな意味で不安であり、そのことをわかつてくれる誰かが欲しくてアピールしているようです。ひろばでは精いっぱい、スタッフもボランティアも

一緒になって聴くこと、親の気持ちも聞きつつ子どもはどうか？ と双方に寄り添うことから始めます。子どもが就園する前というのは、所属感の無さから来る浮遊意識があり、どこかに帰属している「私」という意識をもちくに時期です。

従つて、ひろばに来てくれている間は、その存在を認め、子育て中にもかかわらずこんなにも力を発揮してくれている「あなた」に感謝を示すことを大事にしています。子どもの誕生日も、親族だけでなく、ひろばに来ている全員でお祝いをし、悲しいことも辛いことも一緒に受けとめていくよ……というメッセージをこの時期に発信していくことがとても大事だと思えます。

ひろばにおける親支援

ひろばでやっている親支援は、「ただ、そばに居る」「聴くことに徹する」存在になること、そして困った時、立ち行かなくなつた時に、より具体的な「手」になることに尽きると思つていきます。

一度誰かに受けとめられて支えられた人は、全員ではありませんが、確実に次の人を支える側に回っていくようです。このことは、びーのびーのの現スタッフ、ボランティアが利用者から循環して成り立っていることにも表れており、それが一番の成果とも感じています。

大変だった経験をもつ人ほど、自分が助けられた実感と、大変だという当事者意識を大事に、他者のために動くことができるようです。医療やカウンセリング等、ケアする過程で絶対的に必要な数々の療法がある一方で、残存している能力やその人の意思も忘れずに引き出していくこと、そして、ケアがその人の暮らしの中で持続的に保障されていくという生活者視点の支援も必要です。

親支援とは、そのこと自体が、子どもや子育て環境に還っていくことにつながるものであってほしいというのが、私たちの願いです。

子どもと共に、親も親として成長していくので、

学生時代から就業期を通じて長い期間、子どもがいない生活を過ごしてきた親になりたての人たちに、親としての在るべき姿、時に旧態依然の感覚を突き付ければ、意識の乖離はひどくなる一方です。

むしろ、親が親になるための転換をがっちりゆつたりと支えていく必要があります。自分自身で判断できる力、判断したいという権利は絶対的に守るもの、そして最終的な親支援は、その人自身の力を信じることなのだと思います。

(NPO法人びーのびーの事務局長)



▲ボランティアと利用者の交流風景
(びーのびーのが運営する
港北区地域子育て支援拠点「どろっぴ」にて)

私はこう 考える

「親支援」とは言うけれど

親支援とは

佐藤恵美子

はじめに

筆者は学生時代から、障害をもつ子どもの療育や親の相談にかかわってきましたが、障害の有無にかかわらず、子育てをする家族のさまざまな悩みや問題に関心をもつようになりました。そして子どもの発達に限らず、より広く心の問題にかかわるために、臨床心理士の資格を得た経緯があります。

親自身がしっかり抱えられ安定すると、ゆったりと広い目で子どもをとらえることができるようになります。必ずや子どもにも成長・変化が見られるものです。子どもを一番よく知り、本当に子どもに良いことができるのは親なのです。その親が不安定な時に

寄り添い、支えることが親支援といえるでしょう。

親の気持ちに寄り添う養育支援へ

子育てで不安の多くは、ごく普通の健診や気軽な相談の場、親子教室などで対応することで軽減できます。健診後のフォローとしての親子教室に参加した親の感想から、話を聴いてもらった、育児について学べた、親子とも楽しめた、母同士で話ができた、リフレッシュできた、という効果が確認できました。親を支援するということは、①親自身の心に寄り添い、子育てのよりどころになること、そして②安定した親が子どもの心に寄り添い、子どもの力を伸ばせるように見守り助言すること、といえるでしょう。



親自身の心に寄り添うには、前提として、親の気持ちの理解が必要です。精神保健の領域では、親は子どもを産み育てる時に自分と親との関係が無意識によりがえり、いろいろな思いに触れることが多いといわれます。さらに、女性はそれまでの自分の生活が一変するため、孤独感や疎外感もち、自信を失いがちです。そこに子どもの発達のことなどに触れられればどれだけ心が揺れるか知った上で、その揺れに寄り添うことが支援の第一歩といえるでしょう。

母子保健の領域では、周産期からさまざまな形で子育て支援、発達支援に向けた事業が展開され、療育の場でも保護者支援に熱心な取り組みがなされてきています。この四半世紀で女性の生き方が大きく変わってきている現代、母性神話に甘んじているわけにはいかなくなりました。医療の進歩に伴い特別な配慮の要る妊娠・出産が増え、家族の形態も多様化し、より現状に即した研究が求められています。

保育の場での課題

(この項では親を保護者に置き換えて呼ぶことにします。)

保育の場で困難を感じる保護者対応はどんなことなのだろうかとアンケートをとってみたことがあります。すると、発達が気になる子どもの保護者に見られることとして、子どものことを話そうとすると避ける、家では困っていないからと保育士の見解を否定する、子どもの様子が気になってはいるものの療育に関する話題には拒否的な態度をとる、ということが挙げられました。

子どもの発達支援を進めるためには保護者と共通理解をもつことが必要という考えから、保育の場では、保護者の知らない保育集団での子どもの様子を保護者に伝えようという姿勢が強いのです。発達の問題が主ではない場合も、生活習慣や友達関係などについて、その子どもの成長を願い、保護者に助言をしたいと思う保育士が多いようです。

保護者対応に配慮すべき点の一つ目は、「保護者の

「気持ちの理解」です。子どもの状態、特に発達について保護者に伝えよう伝えようという気持ちですが、保護者との関係に壁をつくっていたようです。伝えるのは何のためなのかを問い直すと、保育士が専門機関の助言を仰ぐため、あるいは加配要員をつけてもらうため、そして保護者に就学後のことを意識してもらうため、ということが主な理由でした。

子どもの発達についての話に防衛的・拒否的に見える保護者の気持ちはどう理解したらよいのでしょうか？ 発達に関して防衛的・拒否的に見える言動の裏に潜む心理を知るために、これまでの相談事例をタイプに分類してみました。大きく分けると、養育力の点で余裕のない親なり家庭環境の場合、育児負担が大きいことをわかってほしい思いが強い場合、そして発達が気になるものさまざま背景（その親自身の育ちや現在の家族や身内との関係）があり障碍ということに葛藤の大きい場合、などが見られました。保護者の不安な心境やさまざまな事情が見えてくると、保護者への否定的な印象

が薄れ、一人の子どもの成長を願い、互いに協働する関係ができて始めるといことなのでしよう。保護者の態度の変容が見られたという報告がありました。

保護者対応に配慮すべき点の二つ目は、「子どもの発達のとらえ方」です。子どもの発達というのは、①周産期に始まりさまざまな環境的要因の影響が大きいいため、診断には注意が必要なこと、②日々変化するもので、その発達過程では確定的なことは言えないこと、そして③一刻も早く療育専門機関につなげて治療する必要がある、あるいは、すればよい、というものではないこと、を心にとどめておきたいものです。ゆっくり親の気持ちと共に揺れながら、ただしその時できることは保育士として自信をもってしっかり行い、発達を見守ることが大切です。

発達が気になる子どもの場合でも行動面が気になる子どもの場合でも、保育士と保護者が子どものために協働するためには信頼関係が前提で、信頼関係が成立する前の助言は時に害となることもあるのです。

信頼関係

信頼関係をつくるためにまずは傾聴することが大切だとよくいわれます。ここでいう傾聴とは、相手のすべてを受け入れ、話した内容よりも感情に共感的に聴くことといえます。うなずいたり、相づちを打つ、「……そうなんだあ」「……大変だったのねえ」と言葉を繰り返したり言い換えたりしながら聴くことで語りを促すことができます。それは困ると思うような発言に対しても、真つ向から否定はせず、まづは受けとめて、なぜそのようなことを言うのか気持ちや聴こうとすると、そこから気持ちやほぐれて徐々に本音が聞けることになるものなのです。

どうも話がかみ合わない、自分勝手と見える言動が見られるなど、傾聴を心掛けてもうまくいかないという訴えもよく聞きます。その中には精神疾患や人格的な問題をもち人も多く、保育者の側が疲弊し傷ついてしまうことがあります。現場ではこのような保護者対応に苦慮することが多いため勉強会など

で対応していますが、この場ではここまでにします。子育てはなかなか評価されないものとしてよくいわれますが、勉強に仕事にと努力をしてそれなりに評価を得てきた親たちが、子育てで自信をなくすことがよくあります。親たちも受けとめられ、自信を取り戻し、子どもを客観的に見る冷静さをもてるようになるれば、保育者との協働も可能になります。

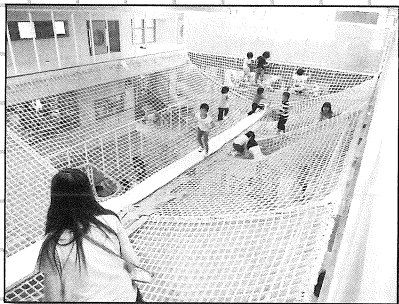
おわりに

保育者たちに親支援についての話をすると、必ずどこかで「でも、私たちは子どもを守るのが仕事」という声が聞こえます。子育て支援政策が進み、親の負担や不安軽減がうたわれる昨今、私はやはり親は子どものために譲らなければならないこともあるのではないかとこの見解ももちます。親に子どもを守る余裕をもってもらうために親支援をしています。が、取り立てて親支援と言わずとも子育てがしやすい社会が理想といえるでしょうか。まだまだ取り組みは続きます。

(臨床心理士)

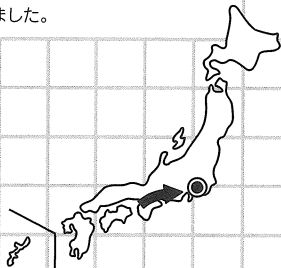
ゆうゆうのもり幼保園 神奈川県横浜市

シリーズ
子どもが
育つ場所を
訪ねて



日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

第8回は神奈川県横浜市にある、ゆうゆうのもり幼保園。幼稚園と保育園、両方の機能を併せ持つ、新しい保育の場を訪れました。



保育園・幼稚園の枠を超えた新しい施設、それが幼保園。ゆうゆうのもり幼保園が開園したのは平成十七年、その後、平成十九年に「認定こども園」となり、現在に至っている。開園当初より大切にしていることは「子どもが子どもらしく育つこと」「保護者の就労の有無や子どもが過ごす時間の長短に関係なく、どの子どもにとっても居心地のいい場所を目指すこと」、そして「常に『子どもにとって』という視点を見失わないこと」。ここであえて「見失わない」と言っているところにこだわりが見える。

「子どもにとって」という視点を中心において新しい保育の在り方を構築している「ゆうゆうのもり」。その思いはどのように実現しているのだろうか。子どもたちの姿を追いながら確かめてみた。

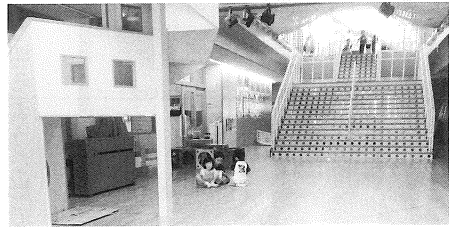
◆上と下をつなぐものから生まれる動き

園の設計を担当したのは環境デザイン研究所（会長 仙田満）。渡辺英則園長を中心に、現場の声や夢を盛り込みながら創り上げた園環境は実に魅力的だ。

「子どもの居場所には縦の動線はいっぱいあっていい」とは仙田氏の言葉。上と下をダイナミックにつなぐ構造が随所に見られる。二階に上がると、屋根裏部屋のような部屋があった。入り込みたくなる空間があり、炊飯器や布団を持ち込み、友達とゆっくり時間を過ごしている子どもたちがいる。空間や時間が子どもたちの思いに任されていることを実感する。



園庭の砂場の上にもネットがあり、一部は小さなハンモックのようになっている。そこに座り、揺れながら団子作りをする子がいた。そのそばで「きなこ砂」で泥団子作り。小さな箱を囲んで子どもたちがじっくり団子を作っている。



▲奥に見えるのが「おおかいだん」

保育室は二階にある。部屋へ戻る時、「どっちから帰る？」と相談している声が聞こえた。中を通って帰ることに相談はまとまり、大きな階段を上っていく。私が「すてきな階段ね」と話しかけると、「おおかいだんって言うんだよ」と誇らしげに教えてくれた。縦の動線がふんだんにある園内で伸びやかに過ごす子どもたち。場を移動する道程もまたワクワクする時間なのだろう。心に残ったのは「おおかいだん」という名前。特別の名前が付けられた場は、うれしい場所として存在感を発揮している。

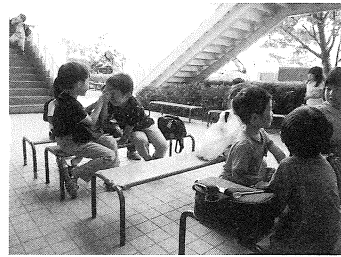
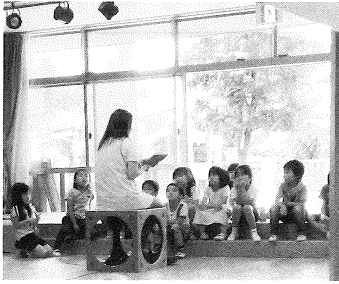


◆光の時間から風の時間へ移るとき

いろいろな動き方をする人たちがいて

ゆうゆうのもりでは、時間にも名前が付いている。光の時間（通常の保育時間）、風の時間（預かりの時間・地域の時間）という名前だ。「預かり保育とは呼ばず、子ども特有の生活時間帯に合った名称で呼ぼう」という考えから生まれた名前だ。「子どもにとって」という視点がここに確かに流れている。

時間の移り変わりは、スパッと切るような形ではなく、重なりながらゆっくり移っていく形だった。一時半ごろ、各クラスでの集まりを終え、子どもたちはそれぞれに分かれていた。預かりの子たちは年齢ごとに集まり、先生の話を聞く。先生は最後に、「○○君、四時です」「△△ちゃん、



四時半です」と知らせていた。子どもたちは「はい！」と返事し、それぞれに遊びだした。

一方、帰る子どもたちは乗車する園バスごとに2グループに分かれている。第一便の子たちは、玄関前のベンチに座り、バスを待っている。遊びスペースからは遠く離れたこの場所、たっぷり遊んだ心地よさを体に残しながら、友達とおしゃべりを楽しんでいた。

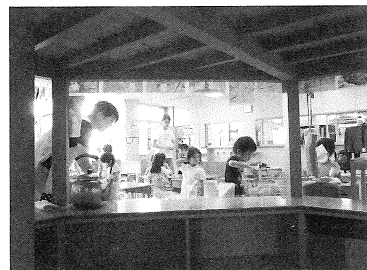
第二便のバスの人たちは、しばらく園庭で遊ぶ。広いテラスに自分のカバンを置き、預かりの子たちと一緒に遊びだした。大きなヤカンに水を入れ園庭にまき、泥の池を作りだしたり、斜面にホースで水を流し、滑り降りたり、ダイナミックな遊びが次々に始まった。砂場では水路作り。ペットボトルに水を入れて運び、二人一緒に流したり、水の行方をみんなで確かめたりして遊んでいた。



二時半、第二便のバスの時刻。帰る子たちは片付けを終え身支度を整え、待合場所へと向かう。階段を上り、二階テラスの長い外廊下を通り、玄関の待合場所へ行く。その道程の中で、遊びの時間から帰る時間へと自分自身で切り替えているように思えた。



▲「本よんで」の声にこたえて……



▲食べたい時がおやつタイム

◆風の時間 家庭的雰囲気大切に

三歳児には「眠りたくなつた人は寝ようね」という呼びかけがあつた。寝る子たちは二歳児保育室へ。すでに二歳児がスヤスヤと眠っている。風に揺れるカーテン、天井でゆっくり回る大きな扇風機。すべてが穏やかだ。先生もゴロンと横になる。少しキヤツキヤツとなりそうになると、「みんな、ゴロンしている時はシーだよ」と優しく話していた。

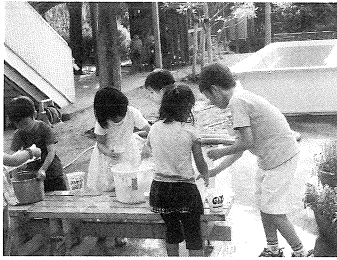
おやつはフリータイム制。自分が食べたい時にラ

ンチルームに行く。かごの中に名前のカードがあり、自分の名前カードを出しておやつをもらおうというやり方だ。子どもたちは自分のペースで思い思いに食べに来ていた。おやつ担当の先生は市から派遣されている人だという。お母さんのような温かさのある人だった。

昼寝もおやつも子どもの思いやペースに沿って。家庭の時間がしつかり意識されているのを感じる。

◆風の時間　　～園内に地域を持ち込む～

小学生ボランティアA君（二年生）登場。風の時間は地域の時間、子ども同士が家を行き来したり地域で遊んだりする時間だ。それを園内に持ち込みたいと考えて始めた小学生ボランティア。夏休みには、さらに在園の保護者が子どもを連れてボランティア



に来ることもある。それも大歓迎という話だった。「A君こんにちは」といろいろな先生に声を掛けられ、久しぶりの園内を歩き回っていたA君。しばらくして色水遊びの仲間に加わり遊びだした。気負うこともなく自然体のままで。これが風の時間の色合いなのかもしれないと思った。

◆光と風、それぞれの時間について考える

ゆうゆうのもりの風の時間、それは、預かりの時間という意味だけにとどまらない。光の時間を楽しんだ子どもたちが、自分の時間へと入っていく時間である。自分の時間を過ごす場所は、それぞれに違う。自分の家で、近くの公園で、そしてゆうゆうのもりの中で、子どもたちはそれぞれの「風の時間」を過ごしている。広がりのあるそれぞれの時間を過ごした子どもたちは、明日になればまた「光の時間」に集まり、友達と一緒に遊ぶ中で多くの体験をしていくのだろう。

「子どもにとって」という視点は、子どもたちが過

ごす遊び空間づくりや時間づくり、名称の付け方、生活や遊びの在り方の中にしっかりと反映されていた。

最後に渡辺先生から話を聞いた。「保育園卒と幼稚園卒のバランスが大切。ゆうゆうのもりでは幼稚園卒がしっかりと維持されている。どちらの卒ともちょうどよくいるときに、幼保園としての意味が出てくる」という話はとても興味深い。バランスの問題について、しっかりと考えてみたいと思った。

また、今後していききたいことは？ という質問には「保育者が育つことを真剣にやらないといけないと思う。中堅の人たちの居場所をつくりたい」という答えが返ってきた。さまざまな場で、子どもの姿や保育の在り方について発信している渡辺先生らしい言葉だと思った。

新しい保育の構築に果敢に挑み、常に試行錯誤を重ねているゆうゆうの

	保育園	幼稚園
0歳児	6	0
1歳児	10	0
2歳児	11	0
3歳児	11	50
4歳児	11	50
5歳児	11	50

▲現行の定員（3～5歳児では保育園児、幼稚園児が同じクラスに在籍）



もり。「子どもにとって」という視点を中心に置き、これからも歩みを進めていってほしいと願っている。

訪問者／川辺・宮里

文／宮里暁美（お茶の水女子大学附属幼稚園）

*夏号（第二二巻第三号）に、渡辺英則先生の講演記録が掲載されています。併せてお読みください。

— 訪問メモ —

訪問時期：2012年6月

訪問場所：認定こども園

ゆうゆうのもり幼保園

〔住所〕 神奈川県横浜市都筑区早渕 2-3-77

〔電話〕 保育園：045-590-0767

幼稚園：045-590-0765

[http:// www.youyonomori.ed.jp/](http://www.youyonomori.ed.jp/)

私の先生は子どもたち

小林奈央

「小さいころから保育園の先生になるのが夢でした！」と保育士の方のほとんどがおっしゃると思います。しかし私は大学在学中、保育実習やアルバイトでたくさんの子どもたちとかわかりましたが、すぐに結果を求めてしまったり、決まった手順で事を進めていくことを求めてしまう私には、子ども成長をそばで見守ったり、毎日違った姿を見せる子どもたちに寄り添う現場の先生は向いていないと感じました。そして大学三年の秋から、民間企業の就職

活動を始めました。民間企業といっても、子ども服やおもちゃなど子どもに少しでも関係のある企業を受けていたため、「そんなに子どもが好きなら保育

士になれば？」と面接で何度も言われました。そんな中、内定を頂いた会社は保育園をつくり運営していく会社でした。

内定をもらったうれしさもつかの間、「本当に現場を知らない私が、保育園をつくれ増やせの仕事をしてよいのだろうか？」という疑問がわいてきました。現場を知らずに理論だけで、私の考える「子育てにかかわるすべての人が楽しいと思えるような子育て支援」などできないと考え、そこで、子どもたちや保護者のことを一番に考え、子育て支援を行ってほしいのは公の機関だと思い、公立保育所の採用試験を受け、保育士になる道を選ぶことを決意しました。

毎日がドタバタの一年目、二歳児担任！

配属された園は、区内でも児童数の多い保育園でした。実習していた保育園は少人数だったため、クラスの子どもの人数の多さに、毎日あたふたしていました。一年目の保育士には、指導担当の先輩との交換日記を行うようにと、区から一冊のノートを渡されています。このたび「私の保育ノート」を執筆するお話を頂戴し、二年ぶりにその交換日記を開いてみました。そこには、今振り返ると赤面してしまうような日々の苦悩が書かれていました。中でも、「子どもたちを次の活動に誘う時、『よしよし！』と声を何度も掛けたのですが、『いや！』『ダメ！』と言われ、結局トイレや次の活動に気持ち良く向かわせることができなかったです」という悩みが一番多く書かれていました。今、この自分自身の書き込みを見ると、「そんなのあたりまえ！二歳は発達段階では自我の芽生えの時期であり、イヤイヤと言っ

ているのが順調に発達している証拠。ましてや信頼関係もできていない、来て間もない保育士の言うことを聞くはずがない」と容易にわかるのですが、その時の私は、早くクラス担任の一人として一人前の仕事をしなくてはと必死だったのです。

しかし、一週間二週間と子どもたちと過ごしているうちに、子どもたちは初めて見る保育士である私をよく見ているのだなと気付きました。特に、子どもたちの前に立つと、〃この先生はどこまで許してくれて、どこからは叱るのだろうか？〃この先生はどんな楽しい遊びをしてくれるのだろうか？〃という子どもたちの気持ちが手に取るようにわかるようになりました。今思えば、お互い不安で探り合いだったのだと思います。子どもたちの気持ちに気付いてから、子どもたちの期待に応えよう、楽しい遊びをたくさんしようと思ったのですが、大学時代、教職課程も取らず、実技の勉強もまったくしてこなかった私は明らかに勉強不足でした。勉強するのは今か

らでも遅くないと考え、二歳児の手遊びや絵本、戸外遊び、室内遊びなど、研修に参加し、保育雑誌を読み、勉強しました。先輩方に比べてできることは少ないかもしれないけれど、私にしかできない遊びを考えようと毎日必死でした。そして、その身に付けた遊びで、子どもたちと一緒に楽しい経験をたくさん重ね、子どもたちに「この先生の言うことなら聞いてみようかな」と思ってもらいたいと考えたのです。その気持ちはすぐに子どもたちに届きました。「ミッキーの手遊びやって！ なお先生しか知らないから、先生やって、早く！」と子どもたちから誘ってくれるようになったのです。

子どもたちは、私が仕事を始めてから苦戦していた保護者対応にも助け舟を出してくれました。まだ自分の子どもを育てたこともなく、保護者からの質問にもきちんと答えられる自信がなかったために、保護者の方とのやりとりは緊張の連続でした。しかし、子どもたちと信頼関係ができたところ、「家でおお先生がやってくれた遊びの話をしているんです

よ」と保護者の方から言っていただけのようにになりました。そのことが少しずつ自信につながり、緊張することが減ってきました。当時の園長先生に「保護者対応の秘訣は子どもたちと仲良くなること」と言われていたのですが、まさにそのとおりでした。

半年がたったころ、保育にも慣れてきたのですが、当番時の他クラスの保育では失敗の連続でした。当番時は二歳児ではない年齢の子どもたちを保育するため、私が設定した遊びに子どもたちが満足しなかったり、信頼関係ができていないために話をしてもうまく伝わらず、次の活動に向かわせる時には叱ってしまい、笑顔で保育していることは少なかつたように思います。「向いていないのでは……」と思うことも何度もありました。しかし、そのたびに、担当クラスの子どもたちの「なお先生、おかえり！」「待ってたよ」という言葉に救われました。

三月、クラス希望を出す時期になり、「この子たちの成長を来年度もそばで見たい」と思い、持ち上がり三歳児クラスを希望しました。

二年目、一歳児担任。言葉が通じない！

二年目は、希望に反して一歳児担任でした。「一歳児には一歳児のかわいさがたくさんあるよ」と言われたのですが、正直、最初の二か月はそのかわいさを感じる暇もなく、ただただ二歳児との違いに戸惑う日々でした。人見知りから、持ち上がり担任が部屋からいなくなると号泣され、それでも何とか受けとめようとさまざまな声掛けをしましたが、うまくいかず、帰ってから家で泣く日々が続きました。

そんなある日、前年に担任したクラスの子が、家で「なおせんせいだいすき」と手紙に書いて、一歳児クラスの部屋に届けてくれました。その手紙に、「この子たちとだって一年前は同じだったじゃないか。信頼関係のないところからここまで時間はかかったけれど、大好きだよ」という気持ちを伝え続ければ、必ず子どもたちに届く」という、忘れかけていたことを気付かされました。その日以来、この子た

ちとも楽しい経験をいっぱいしよう、そして今年の担当の一歳の子どもたちにも、この先生と一緒にいると安心できるし楽しいと感じてもらおうと心に決めました。安全面で子どもたちに注意しなければいけないこともあるけれど、それは信頼関係のできている持ち上がりの先生方に任せ、できるだけ「一緒に楽しいことをした」と子どもたちに思ってもらえるようにしました。

ある日、一歳児の子どもたちと、ままごとコーナーで遊んでいた時のことです。二歳児クラスの時はい保育園ごっこやレストランごっこ等、しっかりと設定のもと、言葉のやりとりを盛んにしながらごっこ遊びを行っていたので、言葉もなくお皿や食べ物だけのやりとりをする一歳児の子どもたちにかかわればよいのかと戸惑いました。そして同時に二歳児担任の時は、言葉に頼って保育をしていた自分に気付きました。しかし、子どもたちと一緒に、ままごとコーナーで遊んでいるうちに、子どもたち

が私の手を引いてお皿を渡してくれたり、食べ物
私に渡した後には「おいしい？」という表情で顔を
傾けて私のことを見ていることに気付きました。

まだ言葉でのやりとりが少ししかできない一歳児。
言葉に頼らず、子どもたちの表情から子どもたちの
心の声を聴き、それに寄り添い、私自身の気持ちも
表情で伝えるようにしなければならぬと思いまし
た。そのためには子どもたちとの遊びに一緒に心か
ら楽しいと感じることが大切だと思いました。一歳
児の保育資料を読みあさり、感触を楽しむ手作りお
もちゃもたくさん作りました。子どもは正直で、こ
ちらがどんなに苦勞して設定した遊びでも、面白く
ないとすぐにやめます。でもそのたびに、何がいけ
なかつたのかを考えることができませんでした。理由は、
発達段階に合っていないかつたり、準備不足だつたり
とさまざまでしたが、少しずつ私の思いは子どもた
ちに伝わっていききました。言葉は多くはないけれど、
朝私が抱いても泣かなくなり、子どもたちのほうが
らひぎの上に座りに来ることも増えてきました。

「お母さんやお父さんと離れるのは寂しいけれど、先
生と一緒にいたいかな！」という心の声が少しずつ
増えてきたように思えます。そして、言葉を覚えた
ての子どもたちに「なおせんせい」と呼ばれた時、
「ママー」と呼び間違えられた時のうれしさは今
でも忘れられません。時間はかかったけれど、二年
目の四月に先輩から言われた「一歳児のかわいさ」
に、ようやく気付くことができました。

そして三月。二年目も持ち上がりを希望しました。

念願の持ち上がり！ 二度目の二歳児担任

念願の持ち上がりで二歳児のクラス担任になりま
した。一年目と同じ二歳児クラスですが、信頼関係
がすでにできているという自信と、もう言葉が通じ
る年齢になったという思いから、言葉を指示の手段
として使ってしまったという自分に反省する毎日です。
一年目に信頼関係の築き方を、二年目に言葉ではな
いやり通りの大切さを子どもたちから学んだのに、
それを無駄にしてはいけなさと自分に言い聞かせな

がら保育をしています。

そして二歳児クラスになってから強く感じるようになったのは、子どもたちは私たち大人の鏡だということです。あるごっこ遊びでの一場面で、女の子が男の子に対して「持つてきて。後でじゃない、今！今持つてきて！」と強く言っている場面がありました。その場面を見て、はっとさせられました。「きつい言い方だな」と思った言い方は紛れもなく、保育士である私が子どもたちに次の活動へ向かわせる時に使っている言葉だったのです。子どもは大人の言うとおりににはならないけれど、やるとおりにやるという言葉を研修で聞いたことがあるのですが、まさにそのとおриだと思えます。大人のやることをよく見ている子どもたち。「大人はいいんだよ」「先生はやってるけれど、みんなはしちゃいけない」は通用しないと日々感じます。片付けの動作、ご飯の食べ方、こうなつてほしいという姿があるのなら、まず、大人である私たち保育士がやってみせなければ

いけないということを忘れずに保育をしています。まだ保育士三年目。間違えることも、失敗したなと感ずることも多々あります。しかし、そのたびに、子どもたちの「なお先生！」の声に、「大丈夫だよ。私たちは先生のこと見ているよ」と言ってもらえているように励まされます。

保育士をもともと目指していたわけではなかったために、私の保育には足りない部分がたくさんあります。しかし、子どもたちの先生になるのは今からでも遅くはないということ子どもたちから学びました。子どもたちから教えてもらったこと、感ずさせてもらったことを一つひとつ書き留め、私の保育の教科書を作り続けていきたいと思えます。そして、その教科書をもとに、子どもたちが成長した時に、子どもたちが楽しい思い出として思い出し、「先生みたいな大人になりたい」と思ってもらえるように、一人の大人として、保育士として、保育をしていきたいと思えます。

(東京都公立保育所)

ごちゃごちゃと遊ぶ中で

小川知子

三歳の子どもたち ごちゃごちゃロケット

その日、三歳のA児は保育室の椅子を次々と運び、道のような、橋のようなものを作り始めました。あれよあれよという間に、椅子が保育室の端から端まで並びます。面白そうなものができている、何かが始まりそう、という雰囲気を引き寄せられたのでしょうか、次々と子どもたちが集まってきました。作っているA児自身も、友達が集まってくることをうれしそうに受け入れていました。はじめは整然と真つすぐ並んでいた椅子でしたが、徐々に変化が出てきます。A児が椅子を動かすと、それをまねるように

一緒に動かすB児がいたり、部屋の隅の方に隠れている椅子までもさらに引っ張り出してくるC児がいたりして、場はどんどん変化していきます。

「あらまあ！」

別の場へ出向いた後に戻ってきた私は、目を丸くしました。ぎゅっと保育室の中央に集まっている椅子の真ん中に、ままごとコーナーに置いてあったテーブルがどっかりと乗っていたのです。その周りには子どもたちのにぎやかな声。傾いて椅子から落ちそうになっているテーブルを、慌てて真つすぐに戻し、ほっとする私。『ああ崩れないでよかった』。しかし私の心配をよそに、さらにものが運ばれていき

ます。

ままごとのごちそう、お皿、じゅうたん、ぬいぐるみたち……。足の踏み場もないような場で、子どもたちがたくさんのものに囲まれています。「靴を脱がないとダメ」。私に笑顔で教えてくれる子がいました。確かに、いつの間にか子どもたちは皆はだしになっていて、椅子の下に靴があちらを向いたり、ひっくり返ったりして置かれていました。最後は、その場がロケットに見立てられ、ごちゃごちゃな中に何人もの子どもが乗り込み、思い思いの行き先に向かって出発していききました。

「僕が運転する」「私が運転する」「ビュー」「もう着きました」「まだ降りちゃダメ」

口々に違うことを言いながらも、友達や先生と身を寄せ合って乗っていることがうれしくて、楽しくて仕方ないという雰囲気があふれていました。

私は、今年度初めて三歳児の担任を受けもつてい

ます。四月からの生活はまさに、未知との遭遇。冒頭のような場面で、私の予想を超えてごちゃごちゃと遊ぶ子どもたちの姿に、一瞬たじろぎ、思考も動きも停止、という時も少なくありません。担任の私だけがジタバタと慌てたり、どぎまぎする心を封印して平静を装ったり、とっさにとった自分の行動を保育後にずっしりと悩んだり……。

『ごちゃごちゃ』という表現で子どもの姿を表すことの中に、最初は少なからず否定の意味を込めてしまいう面が私にはありました。

『何であんなにごちゃごちゃするんだらう』
『でも、何であんなに楽しそうなんだらう』

そんな思いを抱えながら子どもたちの姿を振り返った時に、数年前に担任していた四歳の子どもの姿が思い浮かんできたのです。

四歳の子どもたち 小さな実験者たち

砂場遊びが大好きで、連日砂場でよく遊ぶ子ども

たちでした。それに伴い、砂場の砂はどんどん減り、とうとう夏休みに、砂を足すことになりました。なみなみと新しい砂が入れられ、白くさらさら光る砂場。長い休みが明けて戻ってきた子どもたちは、この砂場でどうやって遊び始めるのだらうと、思いをはせながら砂場を眺めていたことを思い出します。

そして迎えた二学期。長い休み、と思っていたのは私だけで、子どもたちは時間の空白などなかったかのようにあっさりと、自然に、園の生活に戻っていききました。「さあ遊ぼう」。一学期と寸分変わらない様子で砂場に飛び出る姿を見て、『砂場の変化に気付くかしら?』と私は興味津々でした。靴下を軽やかに脱ぎ、はだして砂場に入った子どもが「海みたい!」と声を上げます。砂浜を思い起こしたのでしょうか。周りの子どもたちもその声を聞き、慌ててはだしになったり、手を突っ込んでみたりして、砂の感触を確かめていました。

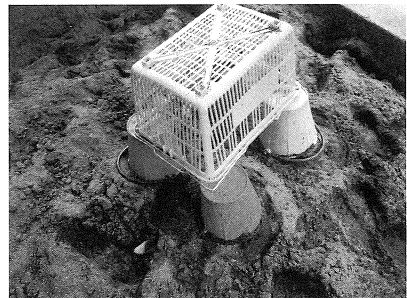
はだして砂場をひとしきり歩いたある子が、おもむろにバケツを四つ、砂場に並べました。そして、

何かがひらめいたように、バケツの上に、砂場の道具を入れていた面白い物かご（スーパーマーケットで使うようなプラスチックのもの）をひっくり返して乗せたのです。さらにその上から、じょうろで水をかけていききました。

「雨だ!」

面白い物かごの網目をちよろちよろと水がつたい、しずくが少しずつ大きくなり、耐え切れなくなったしずくが、ぽたりと落ちます。落ちたしずくは、残暑厳しい九月の日差しでさらさら乾いた白い砂に、どンドンどンドンしみ込んでいきました。その様子は、広い大地に雨がしみ込んでいくさまそのものだと、私も興奮気味にその場で眺めていました。

『雨』を楽しんだ後、子どもたちは砂場にかがみ込んで、いろいろな道具を次々と砂の中に差し込み始



めました。いろいろ試した結果、使い勝手が一番よかつたのは、じょうろだったようです。水を入れたじょうろを、角度を変えながら砂の中に差し込みました。すると、乾いた砂の少し深い所からしみ上がってきた水が、じわりじわりと砂場の表面を黒く変化させていったのです。

「水が地下を流れて湧いてる。(砂が少し) 動くから(ここの下から水が) 出てるってこと」

「見えない水だね」

「(見えないけれど) でも(砂が) 黒くなっているから、水が通っているってこと(がわかるね)」

子どもたちは自分の気付きを言葉にしてみました。新しい砂が足された砂場で、いつもとは違う感触を味わい、ほんの少しの変化を感じ、自分なりの表現で実験結果を報告し合っている姿。自分の発見したことを、友達や先生に伝えずにはられない姿。それらの子どもたちの姿は、まるで小さな実験者たちのようでした。

スコップ、型抜き、じ

ようご、ふるい。砂場には砂場道具がたくさん置いてあります。でもあの時、子どもたちはそのような砂場道具ではなく、買い物かごを手に取り、それを逆さまにして、砂場に雨を降らせたのです。子どもたちは数あるものの中から、柔軟な発想でものを遊びに取り入れて、『こうしたらどうなるのだろう』と思いついたことをやってみようとしていました。あの時、買い物かごやじょうろを取り入れたからこそ、新しい発見や驚きを味わえたと思うのですが、それらのものを選び取った子どもたちには、ワクワクすることに対して貪欲にかかわろうとする気持ちが根底に育っていたのではないのでしょうか。



『うつつてみたい』という思いの広がり

三歳の子どもたちは、A児の姿をまねて同じように、自分の選んだものを次々と運び込んでいました。そうやって自分の体を動かしているうちに、これを運んでみよう、あれも動かしてみようと、一人ひとりの心までもが動いてきたのではないのでしょうか。自分が選んだものと、『うつつてみたい』という自分の思いをそれぞれの子どもが運び込んでいました。それぞれの子どもがそのようにして自由にやりたいことを表し合う中で、子ども同士が出会い、なお一層楽しくなっていく体験をしていたと思うのです。

四歳の子どもたちは、何かが始まろうとする場を目の前にし、『うつつてみたい』と面白いかもしれない『うつつてみたい』と自分なりの考えに合わせたものを選んで運び込み、柔軟な発想で試していました。ものを使って、具体的に自分のやりたいことを表すことで、どの子の目にも明らかに、

『雨』が降ったことがわかりました。そうやって同じものを見つめ合う中で、自分なりの発見や驚き、感動を友達と伝え合いたくなるような状況が生まれたのだと思います。

必要だと考えたものを選んで運び込む、同じものを見て感じ合う、考えたことを伝え合う。そのようにして、自分のやりたい遊びの中で友達とのつながりを深めて遊ぶ四歳の子どもたちの姿。この四歳での姿の始まりは、三歳の子どもたちが体を動かし心を動かし、一人ひとりがやりたいことを楽しむ中で友達と出会う姿の中にあるのだと私は思いました。

つながる、つながる！

幼稚園にある石畳の川。三歳の子どもがやって来て、バケツから水をこぼしました。乾いて灰色だった石畳は、ぬれたところだけ黒くなります。少し離れた水道から、もう一杯水をくんできて、また水をこぼします。先ほどぬれた部分をゆつくりと追いかけるような水。それを見て、「つながる、つながる！」

と、うれしそうに声を上げます。近くにいた子どもたちも、何だろうと近寄ってきました。そしていろいろなものに水を入れてきて、同じように水をこぼし始めました。ある子は小さなコップで水を運び、ある子は小さな



ある子はバケツに入れた水を途中にほとんどこぼしながらも最後の数滴を川に落としていきます。そのよ

うなことを、子どもたちは実に生き生きと、そして繰り返し取り組んでいました。すると、はじめは小さなしずくでしかなかったものが、重なり合い、ちよろちよると流れや動きを生み出していったのです。

一人ひとりが自分で選んだものを選び込み、やりたいことを楽しむ中で、友達と出会い、一人の時には思いも寄らなかった楽しみを味わっている三歳の子どもたちの姿。それはまるで、石畳の川の上で小さなしずくが重なって徐々に流れを生み出すようなものかもしれません。自分のやりたいことを存分に楽しむ経験を重ねる中で、時には友達と動きが重なり、一緒に取り組むことで生まれる楽しさやワクワクの『始まり』を見いだす。このことが、三歳の今の時期にとっても大事なのだと私は思います。

今日も三歳の子どもたちが、一人ひとりの運んだものをめいっばい運び込んで遊んでいます。一見『ごちゃごちゃ』にも見える、でも一人ひとりの思いがめいっばい詰め込まれた大切なその空間で、子ども同士のつながりをしっかりと感じながら保育をしています。と願っています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

続

心が育つということ(最終回)

「向き合う」ということ

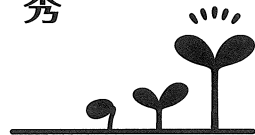
豊田一秀

本誌も冬号となり、四回にわたって執筆してきたこのエッセイも最終回となった。今回は、「向き合う」という言葉を中心に述べてみたい。向き合う、その過程を通して両者間に醸造される大切な心の育ちがあると考えるからである。しかし、同時に、人と人が向き合うことは実は簡単なことではない。場面を大学に移したい。

実習を前にしている学生から、「実習で、子どもたちとしっかり向き合ってきた」という言葉を聞くことが多い。この言葉から、私は学生たちの張り切った気持ちや、子どもと交わろうとする意気込み、すなわち、やる気を感じる。

しかし、半面、一抹の不安も同時に感じるのである。「向き合う」とはどのようなことだと、彼らは考えているのだろうか。人は、本人が向き合おうとすれば、すぐに相手と向き合えるものなのだろうか……。

以前、担任をしていたころのことである。なかなか向き合えない、おとなしい感じの女兒がいた。例えば、その子と手をつないでも、決して私の手を振り払うことはしない。はつきりと



拒否するわけではない。しかし、その子の手から伝わる何とも言えない気まずさ、距離感を私は感じていた。その子が私に対して心を開いていない感じを受けていたのである。

いろいろなと接近を試みてみた。話しかけたり、遊びに誘ったり、一緒にお弁当を食べたり……しかし空振りのことが多く、私は自分の心に課題を抱えたままであった。どうすれば、この子に近づけるのだろうか。

ある時、毎朝、その子がエプロンのポケットにお気に入りのキャラクターの付いたティッシュを入れてきていることに気付いた。私は、自分も同じモノを買い求め、遊んでいる時にさりげなくそれを取り出してみた。その子は、驚いたような顔を見ると、ポケットから同じティッシュを取り出し、私に見せてくれた。柔らかな視線であった。

その翌日から、登園すると、その子と私の間では、ティッシュを一枚交換するという朝の儀式が恒例となった。「おはようー」の言葉は出なかったが、一枚のティッシュ交換が、温かな朝のあいさつであった。そうこうしているうちに、私と手をつなぐ時の、その子の手の感触は屈託のないものへと変わっていき、その子自身も元気に園庭で駆け回る子となっていくた。

どこにでもあるような、小さな保育現場の出来事である。しかし、私にとっては、大きなことを教えられた一事であった。保育者としてきちつと悩むこと、ちゃんと困ること。すぐに良い答えが見つからなくてもあきらめずに、困惑の時を耐えること。

保育の世界では、「待つことが大切」とはよくいわれるが、イライラして待っていたのでは待つことにならない。^平そうかといって、忘れてしまったら待つていたともいえないであろう。抽象的な言い方だが、子どもと向き合おうとする時、「いつも、その子のことを思っている」

ことが大切なのだと思う。

そもそも、「向き合う」という言葉には、主体としての意図が感じられる。視線が感じられる。向き合いたい自分が中心にいる感じがするのである。しかし、向き合うと言うからには、自分だけが向き合いたいと思ってもこの関係は成立しないであろう。相手も同じように自分の方を向いてくれなければ、「向き合う」ことにはならないのである。

子どもにとって、相手が自分に関心をもってくれることはうれしくもあるが、時には重くもあるのではないであろうか。人の視線が自分に向けられていると意識した時、人は自由に動けなくなる。向き合おうとする人は、自分の視線について、その強さを意識しなければならぬであろう。

また、向き合おうとする気持ちの持続も問題になると考える。自分が向き合いたいと思った、その時だけ相手を見ていたのでは、向き合うことは難しいであろう。なぜなら、相手と向き合おうとする持続時間が短ければ、相手が自分を見た、「その時」を見落とす可能性が大きいからである。自分が相手を見ていない、その時に、相手は自分を見ている……。前述の視線の問題を考えれば当然のことであろう。

多くの場合、本人が向き合おうとしなければ相手とは向き合えないであろう。しかし、向き合おうとする視線が強い時、相手を不自由にする。また一方で、向き合おうとする気持ちに持続性がなければ、向き合うのはやはり難しい。向き合おうと意思する時に大切なのは、濃く短い時間ではなく、淡く持続する時間なのかもしれない。

こうして考えてくると、倉橋の二つの文章が思い起こされる。「子どもの心もちは、極めてかすかに、極めて短い。濃い心もち、久しい心もちは、誰でも見落とさない。かすかにして短き心もちを見落とさない人だけが、子どもと俱まじにいる人である。」^{注3}「用意なしに客を迎えてはならぬ。しかも、客を迎えてその用意を強いてはならぬ。用意は細心でなければならぬ。しかし、細心は当方の心がけであつて、それを客に示すべきものではない。」^{注4}




保育者は、発信する力とともに、いや、それ以上に、受信する感性を求められている。そして、その受信を基に次の発信がなされる。向き合う相手を子どもからいろいろと変えてみた時、親子、夫婦、兄弟姉妹、友達、恋人……それは、単に保育者のみに求められる事柄でないことにすぐに気付くのである。

(玉川大学)

注

- 1 津守房江は、その著書『育てるもの目』（フレールベル館一九八四年）の中で、以下のように語っている。「子育ての中で時には目をつぶることが大切だと思いが、いらいらしながらでは目をつぶったことにはならない。私は子どもに対して目をつぶるということは、祈ることであると思う。」
- 2 津守真は、その著書『保育の一日とその周辺』（フレールベル館一九八九年）において、以下のように語っている。「はじめてのクラスにいったとき、私はこちらから子どもに話しかけたり、誘ったりしないことが多い。手もちぶさたで不安定なのは私の方であつて、その不安から逃れるためにさわがしくして、私の必要に子どもを巻きこんだら、子どもの姿が見えなくなるであらう。」
- 3 倉橋惣三『育ての心』上巻（フレールベル館二〇〇八年）の中の、「こころもち」より。
- 4 倉橋惣三『幼稚園保育法真諦』初版（東洋図書一九三四年）第2編「保育の実際」の扉の言葉より。

からだ考

食べる 
つながる 
育つ 

保育園給食から（前） —— 離乳食を考える

兼田祐子

離乳食から始まる保育園の「食べる」

私の保育園は約五十年前、子どもを産んでも働き続けたいという親たちがつくった保育園です。産休明け赤ちゃんの保育の歴史も古く、年度当初から〇歳児が十八名、途中入所も入れると〇歳児二十四名が在籍する、定員一二〇名の保育園です。現在は育休制度が広まってきたものの、年度途中の入園はしにくいいため、低月齢の赤ちゃんの入所は減ることもなく、保育園で離乳食が始まる赤ちゃんが毎年半数近くになります。ですので、「食べる」を考える時の出発地点はここからになります。

親たちは赤ちゃんの命を育むために「二種類」の命をつなぐ母乳やミルクを飲ませ、大人だけの生活から半年後には「離乳食も作る」という未知の食の世界に突入し、わが子の食の広がり親として手掛けることになります。

保育園に仕事を得た当時の私も、離乳食で「何をどのようにして食べさせるのか」わかりま

せんでした。教科書やそれまでの資料には栄養のことが書いてあったように記憶しています。何を切り口にもっともらしく離乳食の意義を保護者に伝えていくのか、親の生活のことなどわからなかった私は保護者への説明を躊躇ちゅうちよしたことを思い出します。

その後、赤ちゃんの研究は進み、離乳期に唇や舌の動きなどの機能的な発達をしていくものだということもわかってきました。栄養のためだけではないのだという離乳食に対する理解が少し出てきて、保護者にも話しやすくなりました。

しかし、「何をどれだけ」という問いに対しては、厚生省が出していた「離乳の基本」と一歳児の栄養摂取量との数字のギャップを発見し、問い合わせてみたものの、納得がいく回答は返ってきませんでした。でも、私自身が得たものは大きく、「正しいというものはない」ということでした。今考えるとあたりまえのことですが、数字に納得を求めるところから解放されました。

持続可能な食生活の始まりとして離乳食を位置付ける

それならば「離乳食を通して親子ともども健康に暮らしていける」という離乳食のあり方を考えようと、保育園での離乳食を、「生活する」ということに軸足を移して考えていくことにしました。そして、離乳食だけでなく保育園の給食のあり方を見つめ直す機会にもなりました。子どもの成長・発達については保育者と話をしていくことで見ていけばいい。子をもつ親の暮らしがより豊かになり、これからの生活づくりの基本となる離乳食でいこうと、私自身の手で初めて離乳食の進行の目安表を作りました。それは今も使われています。

離乳食の基本にしたことは、次のようなことです。

・基本はお米にする

・昆布と魚のだしを基本に使用する

・野菜は季節のものを使う

そう思うようになったのは、ある研修会で、「鉄分を補える離乳食」という内容で、「レバーとホウレンソウのトマト煮」が紹介されていたことからでした。これって季節はいつ？ ホウレンソウは冬、トマトは夏。そして、一羽の鳥に一つしかないレバーを、鉄分が含まれているからといってやたらと食べていいものではないはず……私が狩猟民族であったなら、やっと捕獲した時に有り難く頂くものだという感覚でレバーをとらえていました。重要な栄養素ではありませんが、鉄分のために離乳食に多用していいものかと使用を控えてきました。

同じように離乳期以降の献立を考えていく時、食材の選び方、何を基準に選ぶのか、どんな献立にするのかも、離乳期からつなげた方針で進めることにしました。決められた栄養摂取量に不自然な形で近づけるという発想には縛られないようにし、なるべく自然で、子どもの顔を思い浮かべながら、しかも合理的発想で献立を立てることをモットーに、

・おいしさの中でかむ力が育つように

・野菜で季節が感じられるように

・たくさん作るからおいしいものを

・冷めてもおいしいものを

・家庭より時間をかけて作ることができるという条件を活かす

このように考えました。― 次号へ続く ―

(朱い実保育園)

編輯顧問
倉橋惣三
と
キンダーブック

ツーリズムへのいざない
地球が小さくなり始めた時代

浜口順子

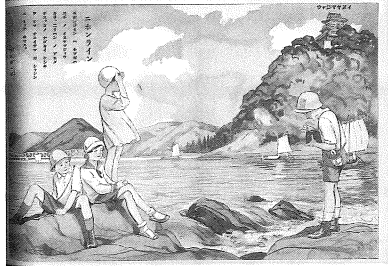
「景色の巻」(第三輯第五巻 一九三〇(昭和五)年八月)

表紙は富士山。二人の女兒がその雄姿に歓声を上げる背後で、男児は背中を丸めて一生懸命スケッチをし、はにかむように読者の方を振り返っている(画像1、絵は岡本帰一)。「きれい! 大きいなあ! などと喜ぶのもいいけれど、細部もよく見ましよう」というメッセージが、観察絵本キンダーブックらしく伝わってくる。

保育者・保護者向けの解説ページ(折り込み)の散逸している巻が多いが、フリーベル館本社で閲覧したこの巻の原本には残っていた。その「絵の説明」には、「富士山はかけがえのない日本の代表的風景であるばかりでなく、その崇高、優美、風雅な姿態は世界にもならぶものなき自然界の象徴美であります。我々は富士を持つ一事のみによっても、日本の自然を世界に誇って可なるのであります。」とある(執筆者は不詳)。

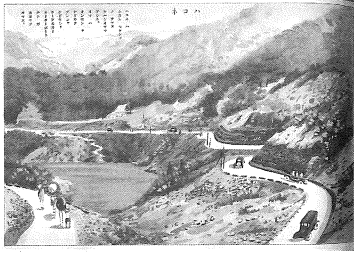


▲画像1 「景色の巻」表紙
(昭和5年8月)



▲画像2 「ニホンライン」

「日本ライン」のページ（画像2）。犬山城を山の頂に望み、帆掛け舟の浮かぶ木曾川沿い。「ニホンラインハ キソガハスデノ イヌヤマジヤウカラ、ニリハンノ アヒダデス。コノナダカイケシキヲ イマ オニイサマガ シヤシンニ トツテイマス」。ファインダーを上からのぞき込む方式の昔風の写真機ではあるが、「子どもがカメラを？ もうこの時代に？」と思う方もいるのでは？ 筆者も含め、この時代かなり技術文明は発達していたと認識を新たにする必要がある。



▲画像3 「ハコネ」

この点は、「箱根」のページでも明らかになる（画像3）。「ハコネハ ムガシ セキシヨノアツタ ケハシイヤマデシタ。イマハ オンセンデナダカク デンシヤ ジドウシヤ ケーブルカー モーターボート ナドガカヨツテイマス」とある。この昭和初期に、交通機関はかなり発達していたことが、この文章からもうかがわれる。各地の観光地を訪れることは日常になりつつあったのだ。そのほかに、松島、天橋立、宮島、雲仙岳、日本アルプス、華厳の滝（画像4、現

在はこれほどそばに寄れず、展望台から望む）、室戸、十和田湖、長瀬、カムイコタン、金剛山、耶馬溪、日月潭（台湾の湖）のページがある。



▲画像4 「ケゴンノタキ」



▲画像5 「世界一周の巻」表紙
(昭和6年3月)

当時、海外からの観光客を招こうとする動きも盛んになっていた。子どもの情操教育、地理教育にとどまらない、国内観光へのまなざしは、次のような解説文に読み取ることができている。「近年日本の自然美はますます外人の認むる所となり、観光客は年々増加の傾向を続けています。貿易外収支としてそれは我が国の国際貸借バランスの改善の上に有利なことが察せられて政府に於いても最近『観光局』を創設し、大いに外人誘致策を講ずる計画であります。」

「世界一周の巻」(第三輯第十二巻 一九三二(昭和六)年三月)

この巻は、国内編だった前掲「景色の巻」の世界編にあたる。「景色の巻」は、いろいろな景勝地が紹介されているだけで全体的な統一感に欠けていた。この「世界一周の巻」は違う。序文に、「幼児太郎と花子とを配して欧米漫遊の形式を以てし、単なる都市名所の羅列でなく、まず横浜出帆の欧州航路をとって、各国の風物に接せしめようと企てました。」とある(執筆者不明)。表紙(画像5、絵は藤澤龍雄)は、たくさんテープを甲板に受け、六歳ぐらいだろうか、コートと帽子姿のちよつと緊張した面持ちの太郎と花子が、港を今や出発しようとするところ。世界一周スタートリーの始まりを予感させる。まずは上海、そしてコロンボ、カイロ、パリ、ベルリン、ベルン、サン・ペテロ(バチカン)、モスクワ、ストックホルム、オランダ、ロンドン、ニューヨーク、カリフォルニア、ホノルルを経て、日本へ帰還するという西航路をとっている。

この昭和初期には、児童向けの文庫に「旅」もの、「世界」ものが入

ることが多かったようである。A R S (アルス) という北原鐵雄 (白秋の弟) が創立した出版社から、全集形式で日本児童文庫が発刊されており、『日本の旅』(田中啓爾著) と『日本と世界』(鶴見祐輔著) とが昭和四年に、『世界の旅』(田中啓爾著) がその翌年に刊行された。同じ時期に文藝春秋社から「小学生全集」が編まれ、その上級用第五九巻に『世界一周旅行』がある。その父兄向けの「はしがき」によると、当時の小学校の教育課程では、世界地理は「尋常五、六年で教える地理書の中の、六年用の半分ばかりがあるだけでありまして、その他には、全く皆無の有様」であったという。しかし一方、「交通機関の利用、名所旧跡の高速度的訪問」は人々の耳目を集めやすかった時代だったようであり、そのような方面の関心を満たすような内容にはしていないと、わざわざ断り書きされている。

「最初の世界一周旅行隊、マゼラン探検隊は、西暦一五一九年から三年を費やしてようやく世界を一周したのでありますが、一九世紀になりますと、急に速度を増しまして、(中略) 二十世紀に入りましてからは、六十日、五十四日、四十日、三十九日、三十五日、二十三日、二十八日、二十三日とだんだんと縮まっております。それは、勿論交通機関の発達と、新しい通路の開発、すなわち山の道、海の道のほかに、空の道まで開けたこと——によるのでありまして、学者の『地球がだんだん小さくなる』と言っているのは、すなわちこのことを意味しているのであります。」(小学生全集編輯部)

昭和初期のこのころのことを、戦後生まれの私などは、どうしても、第二次世界大戦の敗戦からさかのぼって、「意外に発達していたんだな」と考えやすい。しかし蒸気機関車はもとより地下鉄の開通、国内定期航空路開設、一九二九年にはドイツの飛行船飛来を受け、距離

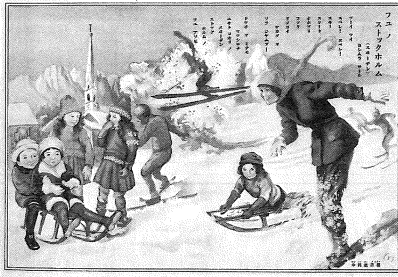


▲画像6 「カイロノミヅウリ」

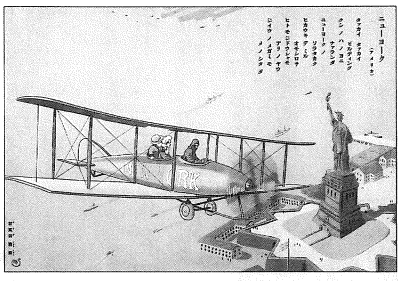
それまでの官僚や国費留学生に代わり積極的に欧米を目指す。こうして平成のいまに通じる大衆によるツーリズム（海外旅行）の幕が開いた。「前置きが長くなったが、キンダーブックの「世界一周の巻」。七五調の文章が面白い「カイロの水売り」（画像6）。「ミヅウリダイサン ノンキダナ カイロノマチノ マンナカデ アツイヒナカモ ブラブラト ミヅウリダイサン ミヅヲウル セナカニシヨツタ カハブクロ チヨイトヒネツテ ミヅヲダス ミヅウリダイサン スズシカロ」——炎熱の町中で水を売る人を「のんき」とうたう雰囲気は、「月の沙漠」（佐藤マサヲ 詞 一九二三年）のロマン主義を彷彿とさせる。

感覚は相当縮まってきただろうし、ラジオや多くの児童向け雑誌を通じて、遠くの間所をより間近に感じながら、「未知の地へのあこがれ」は素朴に、子どもだけでなく庶民の間にも芽生えていたのであろう。

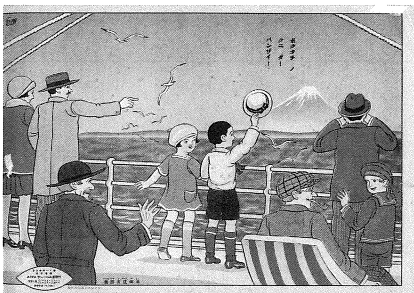
昭和初期の旅行記を研究した田村研平は、この時代を「ベル・エポック（よき時代）」と呼ぶ。「旅行とて例外ではない。明治初期の一八七〇年代、スエズ運河の開通（一八六九（明治二）年）で、世界一周ツアーが始まった。その後、第一次大戦中にパナマ運河が開通（一九一四（大正三）年）、続いてシベリア鉄道が全線開通（一部は一九〇四（明治三七）年、全線は一九一六（大正五）年）し、地球が一挙に短縮された結果、大戦後は世界ツアーが盛んになり、日本へも外国人観光客が大勢やってくる。距離が物理的な単位でなく日数や時間に置き換えられるスピード時代の到来だ。続く昭和に入るや、財力や進取の気性に富む大衆エリートが、



▲「フノ ストックホルム」
 (『世界一周の巻』より)



▲「ニューヨーク」
 (『世界一周の巻』より)



▲「ボクタチ ノクニダ! バンザイ!」
 (『世界一周の巻』より)

「モスクワ」(画像7)のページには、次のような説明がある。「ここはモスクワの赤い広場です。左に見える建物はレーニンという、この国の偉い人のお墓です。ロシアの子どもは皆お仕事をしなければなりません。」(解説には、「幼児も児童も共同的習性を養わせるために、必ず職業を持って労働に従事することは周知の事実であります」とある。)

— 続く —

(お茶の水女子大学大学院)

(引用文は現代仮名遣い等に直してあります。)

参考文献 田村研平 『日本人は何を見たか? 海外旅行記の昭和史』
 社会思想社 一九九五年 p.5



▲画像7 「モスクワ」

海外レポート

イタリア保育

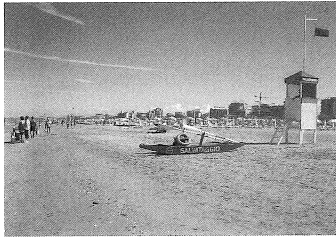
おもいきって

参観記 (1)

「ノストロ プロジェクト」 エミリアローマーニャ州リミニ市

金澤妙子

勤務先の海外長期研修制度で、私は今、イタリア・エミリアローマーニャ州リミニ市に、二〇一二年四月から一年間の予定で滞在している。七年前に五か月間の短期海外研修を同州ローマーニャ市で行った際、当地訪問を勧められたことがきっかけである。本連載ではリミニ市を中心に、他市の保育も紹介していく。

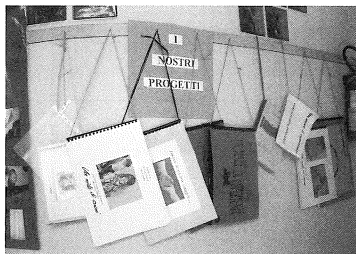


ノストロ プロジェクトの厚み そこから

前回の研修は十一月〜三月末であった。「もう帰るのね、イタリアはこれからいい季節になるのに……」。保育者はそう言った。晩秋からの保育は、室内の活動がほとんどだった。いい季節の庭での遊びも見てみたい、毎日少しずつやっているこの劇活動はどんなふうになるのだろうか。そう思っただけで帰国した。

念願かなって、四月早々現場に入ると、クラス内の壁面やコーナーはもとより、玄関、共有スペースなど園内の各所に保育の様子がドキュメンテーション

ン化されている。保育園（32か月）の入口すぐのホールの壁に、過年度のプロジェクト（英語の「プロジェクト」に近い。大きな目標を集団で実行するための計画、及びそれを実現するための仕事の実行までを含めて指すこともある）を写真と簡単な文章でつづった冊子が掛けてあるコーナーがあり（右の写真）、お迎えの保護者がのんびりと繰っていた。



ここリミニはアドリア海側のリゾート地、園から海まで二、三分という立地からだろう、「海を体験する」という年があつたようだ。保育者の読む絵本に見入る子どもたち、青い箱から取り出された貝殻、それで遊ぶ子どもたち。大きめの紙を前に三人の二歳児が刷毛や手で白い糊をつけ、砂を落とす、フィンガーペインティングで魚に色をつける、ローラーや手で白い紙を水色にする。部屋に黒いビニールシ

ートを広げ、各自洗面器に入れてもらった砂を落として遊ぶ。塩をなめる。青いシートの上に砂を敷き詰め貝殻などを置き、水色に塗った用紙に魚や海草を描いて海の中を表現した紙を周囲に巡らせた部屋で、はだして遊ぶ子どもたち（園に砂場はない）。

九月半ばに始まり六月末に終わる学校暦の四月は、日本の三学期。集大成の時期にポンと入った私には、積み重ねられた保育の日々が覆いかぶさってきた感じであつた。

幼稚園の場合（物語る）

園内に足を踏み入れた途端、ここにはケモノが住んでいると



思われる足跡。壁には『オオカミのこと知ってました?……』と題された「狼」情報のコーナー、続く共有スペースには、森と、子どもが入れる段ボールの家。





この園には、保育園と幼稚園のつながりに配慮して、保育園の最終クラス（27〜36か月）が一つある。「物語る」というプロジェクトのもと、取り上げた題材は、保育園クラス「三匹の子ぶた」、三歳児クラス「赤ずきんちゃん」、四歳児クラス「オオカミおじさん」という当地に昔からあるお話。オオカミが子どもを食べてしまうので、子どもが怖がらないように少しアレンジしたようだ。五歳児クラスが「オオカミと七匹の子やぎ」。オオカミが共通する。

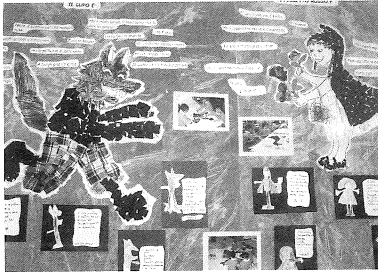
四歳児クラスの壁面には、「ある朝幼稚園に着くと、奇妙な足跡と、色とりどりに塗られた四つの小さな家を見つけたよ。そしてその周りを、重い旅行カバンに変身した愉快なオオカミが、ぐるぐる周っていたよ」(上の写真)。語りは、こんなふうに園に具体的に登場し、

カーニバルの日にはみんながオオカミに変身する。変身の仮面はママが園で作ってくれたものだ。ある園児の母親がオオカミのメーカーシップをしに来てくれ、オオカミになりきって遊び、みんなが赤ずきんちゃんの劇を見た。

部屋の一角にはワインを集めた enoteca (酒庄) をもじった造語で『LUPOTECA』というコーナー。絵本をはじめ lupo (オオカミ) 関連のものを集めている。オオカミ屋さん^{ルポ} といったところだ。lupoteca^{ルポ} なんてイタリア語はない。だが、ユーモラスでしゃれた、センスのいいコーナーの提案の仕方だと思った。子どもたちの描くオオカミはとてすてきなものだ。



▲プロジェクトへの親の参加/オオカミの仮面作り (壁面のドキュメンテーションより)



▲右の写真の部分拡大

もと一緒に描いたものが上の写真である。随所に、描いた時の子どもの様子を写真で示し、子どもが描いた登場人物と、それについての子ども言葉が漫画の吹き出しのようにしてあ
る。お迎えの保護者がこうしたドキュメンテーションを見て話題にしている姿もあった。

三歳児クラスでは「赤ずきんちゃん」の絵本は一切見せなかったそうだ。語りを繰り返した後、「狩人はどんな人？」と聞き、かっこいい、髪とひげがある、帽子をかぶっている、チヨッキを着ている、鉄砲を持っているなど、登場人物に対する子どもイメージを言葉として引き出す段階があり、保育者が布や糸やボタン、さまざまな素材の紙、絵の具などを用意し子どもと一緒に描いたものが上の写真である。

コーディネーターチェからの聞き取りで

幼稚園・保育園ともに全クラスの参観を一通り終えたかという五月、現場での話し合いをもった。リミニ市の公立園には、コーディネイト部署に所属する人コーディネーターチェ（Coordinator）が、市役所から上司・調整役（一人が約8園を担当）として回って来る。「あなた方の保育の中でプロジェクトが一番大事なものですか」と聞くと、「違います。人に説明するのは、難しいのよね」と言いながら、以下のように続いた。

——ロシアの人形（マトリョーシカ）のように入れ子になった三つの箱をイメージしてください。

一番目の箱…〈日常的なしつけ・一番大きくて重要〉生活習慣を繰り返して確認することで、自律を促す。

二番目の箱…〈園生活全体における両親・家族の参加〉

親と一緒に子どもを育てていく。むしろ私たちは両親を助ける存在で、それが子どものためにもなる。例えば、あいさつはひとりで行えるか、両親や先生の援助が一番必要な時はどんな時か、どんな形で援

助すればいいのかなど、近年、両親もわかってきた。
三番目の箱…〈プロジェクト〉

子どもと作っていくが、保育者から子どもに贈る
宝物。ベースはあるが、毎年変わる。年度が始まっ
て子どもや両親を観察しながら、どういうものにし
るのか十二月いっぱい決定。一月ごろから始める。

私たちは自分たちがやっていることを記録に残す。
そうすることでいつも取り出して見(せ)ることが
できる。自分のやっていることを人に話すことができ
るように、また両親に見せるためでもある。両親
は、ここで何が行われているか見えていない。保育
者にとってもプロジェクトがどういうふう生まれ、
進み、どう修正したか。なぜ今こういうことをやる
のかということを確認することになる。――

NOSTRO PROGETTO とは、この一年この子た
ちと何ができるか、残せるかと考えた、「私たちの『試
み』」なのだと感じた。開始後、子どもの様子で修正
することはあっても、中止や全く別のものにするこ

とはないという。在園児の年齢幅を考えると、園全
体で取り組むのは、大き過ぎはしないかという気も
して聞いたのだが、参観していると、さまざまア
プローチで体験したストーリーとオオカミはじめ登
場人物のモチーフは、子どもの中に、そして園全体
にも浸透していた。誰かのちよつときっかけになる
動きでそこにいる人たちが呼応していくような積み
重ねを、保育者と子どもとの間に、また親の中にも
感じた。テーマ決定まで三か月、遂行に半年かける。
各クラスで繰り返し楽しんでテーマは年度末には
「プロジェクト デイタテイコ Progetto Didattico (教育プロジェクト)・オオカ
ミの話」(四歳児の場合) というタイトルの冊子に
まとめられ、子どもと両親のもとに届けられた。

「これは私たち(リミニ市公立)のやり方よ」と言う
コーディネーターチェの言葉で、私が前回の研修で
訪れたポローニャ市では、入園後三年間(担任固定)
のスパンで考えていて、主には五歳児クラスで複数
取り組んでいたことを思い出した。――次号に続く――

(大東文化大学／イタリアリミニ市滞在)

講演

黒井健氏講演「絵本の挿絵について」

第五回 お茶の水女子大学ECCCEL子ども学シンポジウム

(二〇一二年六月二十三日) から

(構成／菊地知子)

二度同じ作品を描いた挿絵の対比

ご紹介いただいた黒井健です。黒井健は本名です。今日は、「絵本の挿絵について」と題して話をさせていただきます。

私が挿絵を添えさせてもらった本は、三百冊ぐらいいありまして、その中で、最も版を重ねてもう百万部に近いのが、『手ぶくろを買いに』^{注1}という本です。一九八八年に出ました。実はその十年前に、私も忘れていたのですが、「手ぶくろを買いに」を一度描いておりました。他にも、時を変えて二度、同じ本の挿絵を描いたということが幾度となくあるので、そ

の対比から入っていきたいと思います。

最初に「かさじぞう」^{注2}。二〇〇五年と一九九五年とに描かれた絵本があります。お気付きの方があるかと思うんですが、先に描かれたものは、どのお地藏様も錫杖しやくじょうを持っています。後に描いたものは、一番左端のお地藏様だけが錫杖を持っていて、他のお地藏様は玉やお数珠などいろんなものを持っています。ただただ合掌しているお地藏様もおります。どうしてこうなったのか。一九九五年の段階で私は、六地藏という言葉に関して何も反応せず、ただ六体あればいいと思っていました。二〇〇五年の時に初めて「あれ？」と思いました。それで編集の方に「六地

蔵って何か意味があるの？」と聞いたら、「あると思います」と。二〇〇五年というのはもうすでにパソコンで検索ができた時代でしたので、すぐに検索をして、荻窪の方のお寺に取材に参りました。その時に初めて、慈悲の違いを表したものが六地藏であることに気が付いて、六体それぞれに持ち物の違うお地藏様を描きました。作家や編集者がその作品とどのように付き合うかによって物語の解釈が変わり、表し方が変わるという一つの例です。

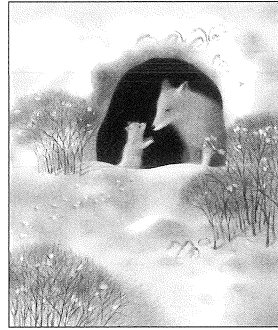
そして「手ぶくろを買いに」です。これは、新美南吉さんが二十歳の時に書かれた作品で、その時代（一九三〇年代）の帽子屋さんをどこに設定するかでずいぶん悩みました。調べてみると、お友達が残した随筆の中に、彼が東京外国語学校に通っていたころの話があり、神保町で本を見て歩いて遊んだり文学論を交わしたりしていた、という記述があったので、神保町を取材しました。現在の神保町は区画整理が終わっていて当時の様子とは違いますが、戦災に逢わないで大正モダンに近い建物が残っています。

したので、それを取材しながら描いたのが一九八八年版の『手ぶくろを買いに』です。

その十年前、一九七七年にも「手ぶくろを買いに」の挿絵を、保育月刊誌に描きました。当時の私は、外国のデザインの作家さんにあこがれていましたので、三角形を基にして重ねていつてデザインするような、積み立て構造で描いていました。こぎつねが初めて雪を見て「まぶしいよう」というような、光が重要であるはずのシーンでも、あまり光や陰影を気にしない描き方をしています。保育月刊誌では当時、シンプルな形と明るい色合いというものが常に求められておりましたので、それに沿って描いたのだらうと思います。

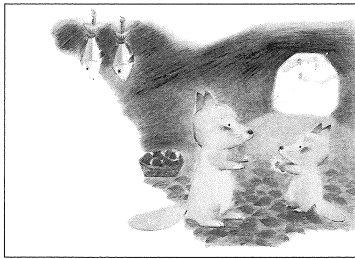
初めて雪の中を歩いたこぎつねが「お母ちゃん手がちんちんするよ」と言うシーン。一九七七年版の絵では、おててがちんちんしていますが、一九八八年のものでは、文章で十分書かれていて感じ取れることなので描いていない。文と絵というのは、ピアノとバイオリンの二重奏のようなものかもしれず、

両方が同じ旋律を奏でてでも意味がない。つかず離れずその曲を演奏していく、というのに近いものではないかと、私は一九八八年の時に思っていました。



▲『手ぶくろを買いに』
(新美南吉 作 / 黒井健 絵
偕成社 1988年) より

保育月刊誌の中には絵を読み取るという要素があったため、一九七七年には、物語に書かれているより細かく、例えば、冬なので寝床を暖かくするための落ち葉や、鮭をつるして保管してあるような様子を、絵を読み取るためのサービスとして描き込みました。



▲『チャイルドブック 1977年度 2月号』
(チャイルド本社) より

それから帽子屋さんのシーンでは、一九八八年には、戦前に神保町でもし帽子屋さんをやっていたらどうなるだろうと考え、ちよつと日本人離れしたおしゃれな帽子屋さんをデザインしました。その十年前には、そういう発想をしなかった。かわいく面白くすることを考えていたんだろうと思います。保育月刊誌として、読み取るための絵を期待されますから、置いてある小物や品物の彩りなど、読み取りのためのいろんなことがサービスとして描かれている。帽子屋さんもかなりひょうきんな感じに、明るい描き方というのを目指して描きました。

物語の本質みたいなものを読むようになって、同じ作家の描いたものと思えないというくらい、絵の表情とか雰囲気が変わりました。

絵の変化へのプロセス

私が初めて絵本に出会ったのは、学習研究社の絵本編集室でした。そこで保育月刊誌の編集者として従事していました。本当は一生勤めるつもりでした

んですけれども、どうしても自分で一日じゅう絵を
描いていたくなって、二年ほどで辞めてしまった。
辞めた後も、学研の先輩たちや同僚たちが、生活が
大変だろうからといろんな仕事をさせてくださった。
それがワークブックのイラストの仕事です。この仕
事で、何が描かれているのか誰が見てもわかるよう
に描く、といった経験をして、本当にモノをよく見
て、どうやって描こうかを悩んで、ずいぶん勉強に
なりました。

戦前または戦後まもなくは、洋画家さんなり日本
画家さんが絵本にずいぶん立派な絵を添えておりま
して、むしろ大人っぽい時代がずっと続いていまし
たが、絵本らしい絵、というのが、マーケットでそ
れなりに評価を得ていく時代になっていきました。
おかしな言い方ですが、いつの間にか私にもかわい
い絵が描けてくるようになり、正直言いますと、そ
のかわいさにだんだん疲れ切つていきます。
もつとも、今でもその時のかわいさが続いている
ものも一つあります。ころわんシリーズ^{注4}です。これ

は現在27冊目ですかね。全部が全部、増刊されてい
るわけではありませんが、悩みながら描いてきたか
わいさの続いている唯一のシリーズです。ころわん
は、かわいって皆さんよくおっしゃるんですが、
ある方が、「でもすっごいブスですよ、ブスでかわ
いいんですよ」っておっしゃる。そして私の顔を
見てくすくすと笑う。どうも私がころわんに似てき
たらしい。顔立ちのいい、かわいい顔、っていうの
と、造作がかわいくないのに、例えばこう、ちょこ
んとした目がかわいいかいいうのがありますよね。
私がころわんの中で見いだしていこうとしたのは、
たぶんそういう存在のかわいさだつたんではない
か。人間の赤ちゃんでも動物の赤ちゃんでも、ほん
とよくできてますよね、かわいがるように。それは
存在のかわいさにはかならない。たぶん保護を必要
とする時に、ほんとに大事な要素ではないかなと思
います。そういうかわいさが描けないだろうかと思
いてきたのが、ころわんなんです。

仕事はおかげさまで本当に忙しく、暇のない、時

間のない日々になって、ある年、年間16冊出版したんですよ、自分が絵を添えた本を。その年の暮れになって、銀座の教文館に、自分の本があるかなと思っ
て見に行ったら、平台にはまず無かった。じゃあ、棚ざしにあるかなと行ったら、一冊も無い。自分の描いた本が一冊も本屋さん
に無いということは、どうということなんでしょうか。ころわんを描くように
なったところが、自分の本が読まれてないことへの疑問がだんだんに出て、
絵本に向いてないんじゃないだろうかと思ひ始めたころです。

「こんぎつね」のEPILOGUE

その絶望感が、絵が変わっていきつきかけになり、先程ご紹介した「手ぶくろを買いに」を描く二年前に、「**こんぎつね**」と出会っていくんです。

それまでは、いたずらをしてその罰ばちが当たって撃たれて死んでしまったという、大変シンプルな理解をしてたんですが、読んだ時そういう心の状態でしたので、まったくそうではなく、驚きの連続だった。

それまで読んでいた絵本とは全く異なり、主人公が最後に亡くなってしまおうという、ハッピーエンドでない物語。そういうものを私は描いたことがなかった。自分の描いた本を誰も読まないという絶望感の上でのことですから、かわいくきれいに描くという既得の方法を失い、どうやって描いたらいいかわからなくなつて、初めて作者を調べた。この人はいったいどういう人なんでしょうか、どういったメッセージがあるんでしょうか。つまり自分の描き方を探すというか、作品への接し方を探し始めた、初めての体験だった。

それです、生まれ故郷に出かけて行って写真を撮つてきました。車で行つてそこに降り立つた時に、非常に不思議な、何かに包み込まれるような感覚がありました。私はそこで三日間ほど、スケッチをしないで、その場の空気を吸い、ぼーっと過ごした。彼が半月ほどいた養子先や生家が、現在もきれいに保存されていて、そこで彼の思いみたいなものを伝記で読みながら、まあ文学散歩に近いことをして帰

つてきて、少しずつスケッチを描き始めていきます。それまでは、絵本を作るプランを立てて、そのプランに沿って全体の展開、大道具小道具、それから情景も考えていったのですが、この絵本の時は私はすべての手法を失ってましたので、それをしなかった。できなかったといったほうが正解でしょうか。だからなのか、「作った」というより「生まれた」、と表現できるような絵本になりました。これを描いて誰にも読んでもらえないなら、絵本をやめようと思つて描き上げました。



▲『ごんぎつね』
(新美南吉 作 / 黒井健 絵
偕成社 1986年) 表紙

私が一番気に入っているのは、この表紙絵なんです。このまなざしであったり、全体の体の姿勢であったり、自分が描いたと思えないくらい、今でも気

に入っております。

で、常に、この絵を超えたい、というライバルにもなつてまして、いまだに超えられないっていうんですか、昔の、良い時代の私の絵なのかもしれないですね。 — 後略 —
(絵本作家)

ここではお話のごく一部しか掲載できませんでしたが、お茶の水女子大学ECCCELでは現在、子ども学シンポジウムの講演録「子ども学ブックレット」を順次発行しており、黒井さんのご講演もブックレット化を予定しています。

- 注
- 1 『手ぶくろを買いに』新美南吉作 / 黒井健 絵 偕成社 一九八八年
 - 2 『かさじぞう』松谷みよ子 文 / 黒井健 絵 童心社 二〇〇六年*
 - 3 『かさじぞう』問所ひさこ 文 / 黒井健 絵 講談社 一九九六年*
 - 4 『ころわんシリーズ』問所ひさこ 作 / 黒井健 絵 ひさかたチャイルド

*本講演で黒井氏が語られた内容は、氏の作品の制作過程のお話のため、実際の絵本の発行年と違っているものもあります。
(編集部)

鈴木とく先生が遺した保育実践記録を読む

— 第五十一巻第七号（一九五二年七月）より —

二〇二二年六月二十八日、日本を代表する保育実践者、鈴木とくが、百二歳で他界した。明治生まれ、生涯独身、保育に生きた「とく先生」。戦前戦後を通じて子どもを命がけで守り、親からも全幅の信頼が寄せられていた。彼女のような先人の英知が、日常実践として、今日も保育の場で生き続けているのだと思う。

保育実践研究者の浦辺史は、鈴木を次のように紹介している。「鈴木とく、といえば、故秋田美子、故珠川善子、根岸松枝（現山下草笛）とともに、戦後日本の保育者として、厚生省の保育指針や保育講座の執筆者として、また、保母の養成、研修の講師として保育界でよく知られている。（中略）国文学を専攻した彼女は、詩をかいたり、童話を創作したり、丹念に保育ノートを書き続けていた。今から四〇年も前の保育を、不確かな記憶に頼って思い出を語るのではなく、記録により事実に基づいて書いている。それだけにこの本は、戦前の民主的な保育の創造について、保育者自身が体験を語るといふ意味で日本の保育史の上で貴重な資料といえる。」（鈴木とく『感傷はいく野迷いあるき』全国社会福祉協議会 一九七五年 より）

本誌上に掲載された鈴木木の考察もまた、保育界にとって貴重な資料に違いない。異年齢保育や母親の会、民主的なクラス運営の草創期の様子、また保育研究者には見えない実践者の視点についてなど、時代を超えて、あるいは今だからこそ学ぶことの多い考察である。

（尚敬大学短期大学部 塩崎美穂）

……二十五人の三才児に、一人の保母が手順よく、他の組にめいわくをかけずに、生活訓練や集団生活の指導をしようとしても、とても容易な事ではない。そんな事から、保育所は大半が家庭的な生活であるとの理屈をつけて、地域別グループをつくり、年長、年少の、同情と協力の生活をさせた事が、保母の手助けとなって人手不足を補ってもらえたり、母親の一部から、お勉強をさせてくれない——折紙を教えたり、字を教えたり、歌や遊戯を教えたりしてくれない、——と不平をもらす人がある事から、年齢混合のグループ生活を、間違つた事をしていく様に感じられて、その中で年齢別にする保育もとり入れたりしたが、何とも云えない和やかな家庭の様なものを感じるこのグループ保育に、今もなお愛着を覚えるのである。街頭に出れば、社会に出れば、常に、同年齢の安定感の中にのみ生活は出来ないし、不安定や、困難を克服した喜びの上に、なおそれ以上の、力や創造への憧れが湧き上るのではないか、そう云う強さも養われる必要があるのではないかと云う考え方が、批判もうけずに私の中にあるから、生活指導の上での年齢混合保育をすて難いものに感じるのかもしれない。

こんな頃の、幼児との生活の日記や感想から、若い方達が昔嚙を読む様な興味を覚えてくだされば、難しい保育理論のあいまのなぐさみに、軽い討論の種ともなるかもしれない。

一九三五年七月

地域別グループをする事で、二時間も話し合った。結局、お互に色々な意見はあったが、地

域を受持った保母が、幼児と共にその母をも受持つて、幼児の保育の効果を上げると共に、母親の生活改善と、生活上をも計って行かなければならないと保育所と母の会の連関について意見が合い、生活と団体の訓練を、主な目標とした保育を試みようと言ふことに大体の意見の一致をみた。云い出しはしたものの、なんだか今後のやり方について不安も感じる。(略)

一九三六年五月

先日からの机の片づけ方の問題を、今日は皆で決めようと、お八つを頂きながら、順々に、どうしたらいいかをきいていった。

「やらない子は、つれて来て一緒にやるの」「お当番がやつたらいいの」「みんなでやるの」

お隣りに坐っている友達の真似をして云う子もあつたけれど、次々に云つてくれて嬉しかったが、全部が云い終らない中に、用事が出来て、子供達からはなれなければならなかつたので、みんなの言い分もきかず、いろいろと話合ひもせず、中途で悪いなと思つたけれど「男の子がお机を運ぶ時は、女の子がお椅子、次の日は反対に、そして順々にして行きましようね。そして、どの子も、どの子もみんなで、お片づけをしまししようね」と、決めてしまつた。

用事がすんで帰つて来たら、大きい子達が側へ来て、「センセ、今日は一等だよ。みんなでやつたよ」と。早速報告してくれた。

「そお、よかつたわね」と云つたけれど、何か子供におしつけてしまつた様な感じていやだつた。も一日延ばして、明日又、お八つの時に、残つた子供達の言葉もきいて、ゆっくり、みんなと相談すべきだつた。決められ、おしつけられた言葉は、その時文で、ほんとに、子供達自

身が、喜んで仕事をし、働く原動力とはならない。大きい方の子供達が納得して、お片づけをみんなて楽しくする様になれば、小さな子については行く。小さい子供達は、やりたくてしかたなくても、大きな、重い机を動かす丈の力がないのだ。このきめも、その中にくづれて行く事だろう。そして又、今度こそ、グループの皆で語り合つて、子供達のやって行きたい方法で、楽しくお片づけをする様に相談しよう。(略)

不況時代、戦争時代、敗戦時代と、各々の社会状態は違つても、勤労者地区の、働く母親の問題、幼児の幸福の問題、一銭と十円の単位は違つても、せがまれるままに、無駄使いさせるお小遣いと、母親の育児、家庭教育の向上の問題は、形を変え程度の違いはあつても、何時もつきまどつてゐる。(略)

最初は、例会のある度に、家々をまわつて出席を求めた母の会が、三年目には、地域の懇談会で、自分達から、勉強会の事を、講習会の事を云い出す様になつた事の嬉しさ、けれど、自分の子供の幸のみ願つて、地域の子供達の悪化には無関心であり、自分本位にものを考へて、自分の都合さえよければ満足な社会生活へ目がむかない母親達は、十五、六年前より、よいと云つても、現在もまだまだ考え方が開けてゐない。

こんなことにとりくんでいる保母さん達のために、理論家はつまらないと目もくれなくても、何処かでなされた、ささやかな幼児との生活のメモが、沢山集つたら、と思つ。そしてらかの、若い人々の胸をうつ「遥なる山河」とは行かないまでも、「大いなる果敢な夢」とても題せるのではないかしら等、とりとめもなく想うのである。

『幼児の教育』平成二十四年総目録

◇春号

編集とそよ風 浜口順子
問い直そう、保育の中あたりまえのこと5 「子どもは元氣」がいいのか？

・インタビュール 渡辺久子氏
・幼稚園の中にある「元氣な子ども信仰」 徳田克巳
・子どもの元氣を再考する―「子どもらしさ」というイメージの中で― 磯部裕子

・「元氣」に思う、いろいろなこと 渡邊満美
遺愛幼稚園 上坂元絵里
私の保育ノートから
・おもちゃの取り合いから考えたこと
―過去の記録から学び直す― 川島明希子
・子どもの目線になって見えたもの 川辺尚子

「意思」を育てる 豊田一秀
命を学ぶ食農保育(1) 命の保育をデザインする 倉田新
編輯顧問 倉橋惣三とキングダーブック
「乗物の巻」を読む 浜口順子
「いのちみんなつながっている」知識より知恵を―本橋成一氏講演 菊地知子

保育におけるリーダーシップ論 井上知香
幼児の教育―一〇年の散策 阪神淡路大震災関連の記事から(1) 菊地知子

◇夏号

子育ての季節 浜口順子
問い直そう6 「遊び」ことは「学ぶ」こと？
・インタビュール 小川博久氏
・「遊び」と「学び」 佐々木晃
・「遊び」とは？「学び」とは？ 横井絃子

・危険と付き合う力をつける 嶋村仁志
ふれあいの家おばちゃんち 佐藤寛子
私の保育ノートから
・変わっていくこと 変わらないこと
―幼稚園からことも園へ― 石矢友里

・保育の学び、教科の学び 満田琴美
命を学ぶ食農保育(2) 保育者のあり方を問う 倉田新
堀合文字先生に学んだこと 豊田一秀
編輯顧問 倉橋惣三とキングダーブック
明治・大正の絵雑誌からキングダーブックへ 浜口順子

現代の保育制度変革の中で起こっていること 渡辺英則
渡辺久子先生のインタビュールから―もう一つの大切な話・遊び― 菊地知子
幼児の教育―一〇年の散策 阪神淡路大震災関連の記事から(2) 菊地知子

「この霧が晴れるまで」他4篇―母親が現在に綴った「福島発、子どもたち」の誕生―東京女子師範学校初代主任保母 松野クララ来日の経緯について― 立浪澄子
幼児の教育―一〇年の散策 戦後の復興関連の記事から 佐治由美子

◇秋号

待つ時間 浜口順子
問い直そう7 「共感」って何だろう？
・インタビュール 佐伯胖氏
・わたしとあなた―幼児の交渉する言葉に注目して― 泉島恵美
・絵を通した共感体験 泉谷淑夫
・バオバブ保育園らしいさな家 川辺尚子

私の保育ノートから
・子どもとミュージカル 榊原友里
・子どもと過ごした宝物の生活 保坂悠希
外に向かう気持ち 内に向かう気持ち
「ぶたにく」から垣間見える農業と命の循環 水flow源彦

編輯顧問 倉橋惣三とキングダーブック
昭和初期の幼稚園を映すテキスト 浜口順子
「この霧が晴れるまで」他4篇―母親が現在に綴った「福島発、子どもたち」の誕生―東京女子師範学校初代主任保母 松野クララ来日の経緯について― 立浪澄子

幼児の教育―一〇年の散策 戦後の復興関連の記事から 佐治由美子

「親支援」とは 佐藤恵美子
問い直そう8 「親支援」とは言うけれど
・インタビュール 牧野カツコ氏
・命絆 未来く子育てひろばの現場から
・聴く―ことから始まる関係を大事に― 松崎恭子
・親支援とは 佐藤恵美子
ゆうゆうのり幼保園 宮里睦美
私の保育ノートから
・私の先生は子どもたち 小林奈央
・こちゃこちゃと遊ぶ中で 小川知子

◇冬号

「向き合う」ということ 豊田一秀
保育園給食から(前)―離乳食を考える 兼田祐子
編輯顧問 倉橋惣三とキングダーブック
ソリーズムへのいざない―地球が小さくなり始めた時代― 浜口順子
イタリア保育。おもいきって 参観記(1) 「フストロプロジェクト」 金澤妙子
「絵本の挿絵について」 黒井健

「絵本の挿絵について」 黒井健
幼児の教育―一〇年の散策 鈴木とく先生が遺した保育実践記録を読む 塩崎美穂

「幼児の教育」平成二十四年総目録

「幼児の教育」平成二十四年総目録

お便り

POST

◇ 読者から
— 秋号を読んで — ◇

秋号の訪問記、実物以上にすてきな場所に思えてきますね。

佐伯先生の「『共感』って何だろう」も、面白く読ませていただきました。大事なところがよく伝わってきました。「放っておく」と「そっとしておく」、何気なく使っている言葉も、時々振り返って吟味することが大事ですね。

(バオバブ保育園ちいさな家 園長 遠山洋一)

秋号の「共感」についての話が心に深く残りました。共感は願いであり、相手に身を寄せ、思いを寄せることなんだと思いました。

「幼児の教育」というより「人間の教育」という感じがします。親としてということを超えて、人間として学ぶ機会になっています。

(幼稚園保護者)

DVDの紹介 「いつもの幼稚園に戻ること」
2011年 岩手県大槌町

企画・制作

(財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
制作 幼児教育映像制作委員会
申し込み先 FAX 047-384-8611

震災によって被害を受けた子ども、保育者、園長、それぞれが「いつもの幼稚園に戻る」過程を、幼児教育の映像づくりに長く携わってきた制作チームが深い愛情あるまなざしでとらえています。

幼稚園が大切な場所であることを改めて伝えてくれる作品です。(KE)

お茶の水女子大学 ECCELL 社会人プログラム
平成25年度 前学期 (4月開講) 受講生募集

お茶大ECCELLは、現職保育者をはじめ保育・幼児教育や子どもに関心のあるすべての方々、働きながらでも夜間に、あるいは集中講義の形で、大学で出会い、共に学び合う場づくりを進めています。多彩な授業配列で、主体的なゼミ研究発表の場もあり、ユニークな共学のたまり場を目指しています。

ECCELLのHP(お茶大、ECCELL)を時々検索してください。「子ども学シンポジウム」などの企画も随時更新してお知らせしております。

[URL] <http://www.cf.ocha.ac.jp/nyuyoji/>

[Eメール] nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

[TEL & FAX] 03-5978-5949

本の紹介

『どんな小さなものでも見つめていると宇宙につながる』 詩人まどみちお100歳の言葉
新潮社 2010年

第5回子ども学シンポジウムでご登壇いただいた黒井健氏が、尊敬する山田太一さんとお仕事について語られた中で、ご自分が一番尊敬しているのはまどみちおさんだと、さりげなく言い添えられた。山田さんもまた、まどさんを尊敬しているのだという。人選のすばらしさに、私は思わず黒井さんを尊敬。

「子どもが一生懸命考えて「ああこれだ!」と分かるような難解さがあることが、本当に「やさしい」ことだと思うのです。」(本文より) (KT)

エピローグ

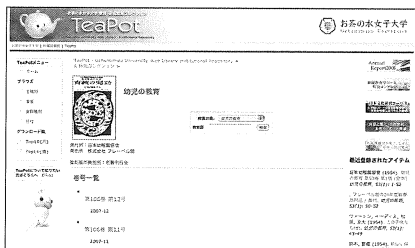
月刊誌から季刊誌へとリニューアルし、三巡目を迎える『幼児の教育』冬号です。年4回のゆったりとした発行ペースが、年々忙しさに追われる保育者の皆様にとって、ちょうどよい振り返りのひとときとなっていますならば、幸いに存じます。

子ども学の源流と現代保育の動向、その両者を歴史の組上に載せるならば、別々の流れとして切り離せるものではありません。変えることのできるものについてはそれを変えるだけの勇気が、また、変えることのできないものについてはそれを受け入れるだけの冷静さが、これからの保育を創造していく者には求められることでしょう。長い歴史を背負う本誌は、その変革の道を探る方々と共に、未来の子どもたちを見つめつつ前進していきたいものです。(S)

幼児の教育 バックナンバーを WEBページで公開中

「幼児の教育」または「TeaPot」で

検索



<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/>

明治34年発行の創刊号から、現在、平成21年発行の第108巻までご覧になれます。

なお、自由投稿、「ひろば」への情報などお待ちしております。
nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp まで。

次号予告 幼児の教育 春号 2013年3月刊行予定

新連載もスタート! 充実した内容でお届けします。

特集 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと9
— カリキュラムはだれが作る? — 戸田雅美先生インタビューほか

シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて — 中瀬幼稚園(東京都杉並区) —

新連載 保育エッセイ 本田和子先生

※タイトル内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 冬号 第112巻 第1号

平成25年1月1日発行
編集発行人/浜口順子
編集担当/田中恭子
発行所/日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所/株式会社フレーベル館
電話/03-5395-6657(編集)
振替/00190-2-19640
印刷所/図書印刷株式会社
定価/750円(本体715円)
©日本幼稚園協会 2013 Printed in Japan

編集協力/フレーベル館
編集スタッフ/伊集院理子
上坂元絵里
菊地知子
佐治由美子
宮里咲美

●ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613(営業)●

保護者との
やりとりが
楽しくなる!

イラストでわかりやすい 対応事例集



どうする? こうする!
これで安心 保護者対応

松田順子 / 著
(東九州短期大学 特任教授)

定価1,785円(税込)

23×18cm 128ページ 10929

Point ①
Q&A形式

明日から役立つ
対応がわかる!

Point ②
イラスト

具体的な事例を
楽しく紹介!

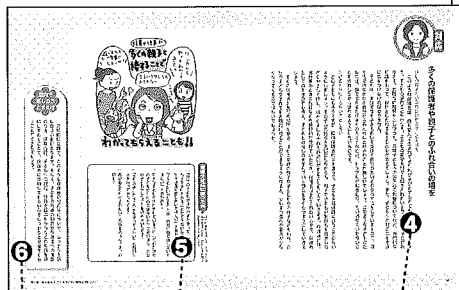
Point ③
ポイント解説

園での注意点が
わかる!

【内容】

- 第1章 いろいろ! こんな保護者~保護者のタイプ別対応法
- 第2章 あるある! こんな子どもに関するやりとり
- 第3章 保護者自身の問題に向き合う
- 第4章 園の方針や体制への要望に対応する

あなたの悩みを解決する 6つの構成



⑤ どうする? こんな例
現場から届いたその他の事例

③ マンガ
相談内容のマンガ

① 相談
具体的な保護者対応の相談内容

⑥ 園内で話し合うときには
園で対処する際のポイントを紹介

④ 対応
注意すべき点や対処法を解説

子ども・保護者
との関係づくりの
特効薬!

保育がもっと好きになる 22の素敵なエピソード



子どもの見方が変わる
みんなの育ちの物語

井桁容子 / 著
(東京家政大学ナースリールーム主任)

定価1,575円(税込)

19×15cm 112ページ 10930

効能① 発達理解

子どもの見方が
変わり、保育が
もっと充実する!

効能② 信頼関係

保護者に信頼
される保育者に
なれる!

効能③ 自己成長

受け入れることで
自分にも人にも
優しくなれる!

【もくじより】

- はじめに
- ナースリールームへようこそ
- 子どもってすごい!
- 困ったトラブル???
- 親も子も育つ時
- 子どもがうれしいこと
- いたずらの意味
- 子どもと一緒に成長
- おわりに

講演会受講者の声

今すぐ子どもたちに
会いたくなりました
(30代・保育者)

私も言葉で
伝えられない乳児の
気持ちを汲み取りたい
(20代・保育者)

ほんわかと
肩の力が抜けて、
心が豊かになりました
(40代・母親)

保護者の成長を
認めてくれる
保育に感動!!
(30代・父親)

エピソードの一例です。続きは本誌にて!

episode 1

子どもってすごい!

風邪で口内炎になった智香ちゃん。痛くて口に入れた食事を吐き出し、しばらくすると「鼻で食べた!」と鼻の下にニンジンベタツ。続いてニヤリとして「おめめから食べる!」と切干大根を頬に。3歳児のユーモアに脱帽です!

episode 2

かみつきをトラブルにしない

友達の手をかんてしまった浩介くん。お迎えに来たお母さんは顔面蒼白。容子先生が止められなかったことを詫び、「浩介くんはやさしい子に育つと保証します」と伝えると、お母さんは心が緩んで涙ぐみ、浩介くんを抱きしめました。

episode 3

ゆっくり育ちに付き合う

バジャマで登園したい太一くん。絶対阻止したいお母さん。朝の“ケンカ”が絶えない親子が、容子先生の助言で変化! 育ちを面白がることを学んだお母さんに見守られ、太一くんはいろいろな体験ができてとっても幸せです!

episode 4

そのまま二重丸!

もうすぐ妹が生まれ、お兄ちゃんになる澁太くん。お兄ちゃんに対する周囲の期待が大きく、少し不安そうです。容子先生が「そのままいいのよ」と魔法をかけると、のびのびと自分を表現するようになった澁太くんでした。

定価 七五〇円(本体七二五円)☆

キンダーブックの **フレーベル館**

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。